移動のなかの生

― モンゴル国オブス県のある牧民をめぐるひと冬の出来事から ―

寺尾　萌 *

本論は、モンゴル国で牧畜を営む牧民を対象とし、宿営地移動というかれらにとって必須の移動実践から、かれらがいかなるモビリティを生きているのかを明らかにするものである。生態学的な研究では、牧民たちの宿営地移動は、季節に応じて牧草地を変えることによって効率的に自然環境を利用し、また自然環境、社会環境の変化に柔軟に適応するための戦略として考えられてきた。また、社会主義時代の国家主導による牧畜協同組合の組織や、民営化後の代替的な宿営地集団の編成は、牧草地の安定的利用や、リスク管理という観点から説明されてきた。しかし、現代モンゴルにおいて、所有する家畜頭数の増加による宿営地集団の解体や自動車所有率の上昇を背景として、牧民たちはより個人的な事情を動機として移動しているという捉え方をする研究も現れている。こうした、個別で具体的な移動の局面を注視する諸研究は、環境のサステナビリティや宿営地集団の機能といった牧畜システム全体の解明を目的とする議論においては俎上にあがることのなかった、移動のただなかを生きる牧民たちの生活世界に光を当てた。

このような動向を背景として、本論では、ある牧民が厳しい冬を乗り越えるため、自身が所属する行政区域の外で臨時避難的な越冬（オトル）をおこなったある冬の出来事を取り上げながら、その牧民にとって移動するということがいかなる意味をもっていたのかを考察する。本論が示すように、牧民は、そのときどきの移動を、当人の経済力を反映させ、社会関係を動員しながら実現させていく。そしてそのプロセスは、複数ある選択肢から合理的に選択されるものであるというよりも、目の前に現れている状況への一回的な反応の連続であるといえる。目の前に現れている状況への対応には、家畜や牧草地の状態といった生態的条件に応じた牧畜戦略も含まれるが、社会関係や家内領域が調和し、快適である（*evtei*）ことを指向する諸環境の調整も考慮されている。そして、動きを伴う社会のなかで、他者との間に心理的・物理的な距離、すなわち〈余白〉を設け、行動や考えに過度に干渉しない態度が散見される。モンゴルの人びとにとって、移動すること、そして距離をとることとは、かれらにとってよりよい生活世界を実現するために離合集散するプロセスでもあるのである。

KeyWords

モンゴル
牧畜
移動
不確実性

目次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．モンゴルの牧畜と季節移動における規則性と非規則性
　1. 調査地の概要と牧民の移動パターン
　2. ネグデルによる近代化とリスク管理
　3. 協働・移動の規則性／不規則性とリスクの個人化
　4. 本論の問題意識――生活世界からみた移動実践
Ⅲ．社会的協働からみる宿営地移動の一回性
　1. ボヤン家の社会・経済的背景
　2. 一回的な出来事としての移動
　3. 偶有性を孕む共同体
　4. 宿営地再編を契機とした分散
Ⅳ．移動の不確実性とコミュニケーションの〈余白〉
　1. ボヤンの離脱
　2. コミュニケーションの〈余白〉
Ⅴ．動き、距離をとることで「調和」する生活世界
Ⅵ．おわりに

Ⅰ　はじめに

本論の目的は、モンゴル国（以下、モンゴルとする）で牧畜を営む牧民（牧畜民）の宿営地移動をめぐる現代的変化を明らかにしながら、かれらがいかなるモビリティを生きているのかを個人の生活世界から議論することである[1]。とくに、宿営地の移動集団をめぐって二転三転する意思決定のプロセスに注目する。

モンゴルの人びとの生活は、移動を基盤として営まれている。四季に応じて宿営場所を移動するのが、モンゴルの牧畜様式であるが、一つの季節が終わりに近づくと、牧民たちは互いの家を行き来するなかで、それぞれがいつ次の宿営地へ移動するのかと動向を探り合うようになる。家人たちはそのやりとりを見聞きしながら、移動時期が近づいたことを知る。「いつ移動するのか」「そろそろだな」などと世帯内でも移動時期が話題にのぼり、男たちは放し飼いにしているウマの群れの居場所を把握しに出かけるようになる。筆者が調査中に滞在していた世帯では、数日後に移動する、と言われて実行に移される場合もあれば、諸々の不都合で移動が延期になる場合もあった。ある朝突然、主が「今日移動するぞ（*önöödör nüüne ee*）」と宣言し、妻と一緒になって慌ただしく準備を始めたこともあった。

移動のなかの牧民の生活を象徴するのが、「ゲル（*ger*）」と呼ばれる組立・移動式住居である。移動すると決まれば、その後の行動は実に迅速である。数十分でゲルを解体し、1時間余りで荷造りは済む。ウシ・ヒツジ・ヤギの群れを追って徒歩や馬で進む者と、ラクダや自動車で荷を運ぶ者との間で、次の宿営地までの経路や途中で落ち合う場所などが決められ、移動が決行される。ウマは先に次の宿営地近辺の牧草地に移しておくか、あとで再度取りに行く。距離に応じて数時間から数日かけて家畜と荷を運び、宿営地に到着すると即時にゲルを再建、2～3日もすれば宿営地移動の慌ただしさは薄れ、日常が戻ってくる。それが、筆者が調査中にみた、移動する牧民の姿である。

ゲルは、牧畜に伴う季節移動に最適化された住居だが、生活の基盤そのものが移動可能であるという点で、牧畜という文脈を越えて人びとの生き方に可動性をもたらしている。1991年まで、70余年におよぶ社会主義体制のもとで、農牧畜業の集団化や定住化が進んだ。現在では約300万人の総人口のうち、半数以上が首都ウランバートルで都市生活を送り、地方部でも、牧民世帯数は総世帯数の半数前後にとどまり、地方自治体の中心機能や病院・学校・文化センターといった施設を備えた中心地に定住して賃金労働に従事する人たちの生活の相関のなかで社会生活全体が成り立っている（NSOM 2018）。この定住者たちにとっても、住居そのものの可動性は、生活に機動力をもたらす重要なシステムである。結婚時に親から贈与される大きなゲルは、ときには骨組みを切断して小さなゲルへと組み替えられ、世帯構成人数の増減やライフステージ・ライフサイクルの変化、それに伴って草原と都市の間で双方向的に生じる居所の移動に対応する（風戸　2015）。たとえば風戸真理が報告するように、草原と都市を往還しながらそのときどきに必要な機能（子どもの就学、就労、福祉や中心機能、老後の生活基盤など）にアクセスする機会をつくり出すことができるという点で、都市民にとっても居所移動の機動性は重要な生活戦略のひとつである（風戸　2015）。こうした生き方は、移動によって資源にアクセスし、資源がなくなれば新たな場所へ移動してそれを解決する移動牧畜のシステムと結びついた機会主義的なものとして理解されてきた。

本論では、資源獲得の手段を越えてモンゴルの人びとの内に息づいている移動性に注目する。レベッカ・エンプソンは、家と共に移動する家具や、そこに飾られる親族写真が、時間的・空間的な分離（separation）を越えて記憶や「つながり（relatedness）」を再生していることを明らかにした（Empson 2011；Cf. Carsten 2004）[2]。エンプソンは、富

* 首都大学東京大学院

1　モンゴルには、「遊牧民」にあたる語として「ヌーデルチン（*nüüdelchin*）」という呼称がある。これは（居所／拠点の）「移転」を意味する「ヌーデル（*nüüdel*）」に、「～の人」という意味の接尾語「チン（*chin*）」を加えた単語である。また、牧畜を営む人は「マルチン（*malchin*）」と呼ばれる。これは「家畜」を意味する「マル（*mal*）」に接尾語「チン（*chin*）」をつなげたものだが、牧畜に従事する人は概して移動生活を送っているモンゴル国内では、あえて「ヌーデルチン」と表現するよりも、単に「マルチン」と呼ぶことが一般的である。そのため、本論でもかれらのことを「牧民」と呼ぶ。また、日本語では「遊牧」という用語で知られ、一般的には「ノマディズム（nomadism）」と同義のものと理解されているモンゴルの牧民の生業／生活様式だが、学術的には「移動牧畜（mobile pastoralism）」という定義が共有されている。これは、「遊牧（pastoral nomadism）」という用語から、自由で不規則な点々とした移動、あるいは放浪という含意（nomadism）を差し引き、定住化や集団化、そして移動の規則性といった特定の時空間のなかで営まれている生業／生活の実態に即して提唱されたものである（Humphrey and Sneath 1999: 1；稲村　2014: 319）。筆者もまたこの定義に基づき、モンゴルの牧民の生活世界における移動性を「モビリティ」という用語のもとで理解している。

2　エンプソンが対象としたブリヤートというエスニック集団に属する人びとは、社会主義時代にロシアの革命を逃れてモンゴルに移住し、その後モンゴル国内でも厳しい粛清を受けた（Empson 2011: 38-57; 島村　2011）。そのため、現在における過去の記憶の再生という点で、時間的・空間的な隔たりが重い意味をもっている。しかしその固有の文脈をこえて、人間または社会に内在する生成的で潜在的な力として移動を捉える視座から現代モンゴルの住空間に言及した点は重要である。

や幸運（*khishig*）は、モンゴルにおいては家やその象徴としてのかまどに集積し、それらと共に動いていくものであると考えた（Empson 2011: 93）[3]。そして、自らが動いていくなかで、「縁起物（*engimono*）」にあたるような調度を飾り、そこに恵みを集めるようにはたらきかけているモンゴルの人びとの行為を、モンゴルの人びとにとってまさに幸運の象徴であるウマ（*hii mor'*）をつなぐための道具になぞらえて「幸運のハーネス（harnessing fortune）」と表現している（Empson 2011: 91-94）。ウマをつなぐのは、つなぎとめておくためだけではない。ハーネスは、ウマをコントロールし、その動力を利用する道具である点で、固定された場所に蓄積するのではない、集積しながらも動いていく富や幸運のイメージを的確に表現する用語といえるだろう。そして、この価値観は、移動に根ざす人びとの生のあり方を、非場所性（dislocation）や分離（separation）といった定住する者とは異なるセンスから理解する彼女の議論の核となるものである。

本論においても、モビリティというときには、牧畜に必要な資源にアクセスし、資源を安定的（stable）に利用するために必須のシステムや戦略のみならず、人間に内在する非安定的（instable）な性質を念頭においている。もちろん、エンプソンも述べているように、人間の諸行為に現れる安定的な指向性と非安定的な指向性は明確に分けられるものではなく、人は双方の間を揺動しながら社会生活を送っている（Empson 2011: 325）。筆者がフィールドワークをおこなうなかで見聞きし、経験した調査地の人びとの生活もまた、周囲の人間を含む諸環境とのあいだで良好または有効な関係を築き、熟成させていくことと、それらとの関係をひとところに留めおかずにおくことを同時に希求するような、ダイナミズムをともなっていた。この異なる性質をもつ指向は相互補完的なもので、その相互補完性は牧草地を安定的かつ持続的に利用することにつながる伝統的な宿営地移動システムと、社会主義的な牧畜業の集団化を経た移動システムの効率化、主体が集団から個人へと移行した牧畜における諸世帯の政治経済的状況、そして自動車やバイクの普及に伴う移動性の増加といったモンゴルの社会経済的諸状況に位置付けられる。また、いまなお進行している定住化のなかで、定住者と牧民とが互いに切り離せない存在として、モンゴルの地方社会全体が成り立っているという背景も存在する。本論では、諸状況のなかで、ある牧民の移動の時期や目的地を決定、実行していったプロセスを中心に事例を提示し、移動のただなかで生きるということが、いかなることであるのかを具体的に明らかにし、それを通して、モンゴルの人びとの社会生活に内在する原理としてのモビリティと、それを支える価値観を探求したい。

Ⅱ　モンゴルの牧畜と季節移動における規則性と非規則性

1. 調査地の概要と牧民の移動パターン

本論は、モンゴル国オブス県のマルチン郡およびウルギー郡において、2016 年 11 月から 2017 年2月までの間に実施した調査に基づいている（図1、2）。この調査は、2014 年 11 月から 2017 年3月までの間、のべ 27 か月にわたってマルチン郡を中心におこなった長期調査の一部であり、筆者は、2014 年 11 月から 2015 年 12 月までの間を定住地に暮らす 40 代の女性エンフと子供からなる世帯に滞在し、2015 年 12 月からは彼女の弟である牧民ボヤンと妻、子どもからなる世帯に滞在して調査をおこなっていた。

オブス県は、モンゴル国の西部に位置している。オブス県の県庁所在地であるウランゴム市は、首都ウランバートルから陸路で約 1500km、直線距離では約 1340km を隔てており、マルチン郡はそこから陸路で約 120km、直線距離では約 100km 南東に位置している（図2）。4000km²の土地に、約 2500 人の人口を擁し、総世帯数約 850 戸のうちの半数、440 戸が牧民世帯として登録されている（NSOM 2018）。牧民たちは、ヒツジ、ヤギ、ウシ、ウマ、ラクダの五畜のうち複数種類あるいは全てを肥育しながら、春や夏には柔毛、秋の終わりには屠畜した肉を売ったり、その他必要に応じて生体の家畜を売ったりして生計を立てている。牧民世帯ではないもう半数は、「郡の中心地（*sumin töv*）」と呼ばれる、行政や教育、福祉などの中心機能を有する定住地に居を構え、行政、教育、福祉機関で働くか、あるいは商店を営むなどの賃金労

3　エンプソンが本のなかで取り上げているのは、儀礼の際にラマ僧から贈られる、5 色の穀物や麦といった、宗教的力の媒体となるものを入れておく全長 20cm ほどの装飾袋や、ゲルの天窓を固定するための縄に結びつけておくウマの尾の束といった、モンゴルではなじみ深い、世帯の幸運を守る装具である（Empson 2011: 92-93）。

働に従事している。

定住者と牧民のあいだでの相互扶助は、モンゴルの地方部では重要なライフラインである。主に親族関係を基盤として、定住者は牧民に自己の所有する家畜を預けたり、牧民から食料となる肉の提供を受け、牧民は定住者から現金の貸借や繁忙期の労働力の提供を受けるなどのやりとりがつねにおこなわれている。季節ごとに牧草地と定住地で分かれて過ごしたり、世帯の構成員が牧草地と定住地で分かれてそれぞれの仕事（学業も含む）に従事したりと、草原の暮らしと定住地の暮らしは明確に分かれるものではない。また、草原と定住地の間にはつねに人の往来がある。

モンゴルの牧畜における宿営地移動のあり方は、地域によって実に多様である。ここでは、マルチン郡の実践に即して、その移動のあり方を概観しておこう。牧民は、理念的には春営地、夏営地、秋営地、冬営地という4つに分けられる放牧の拠点をローテーションで利用する「季節移動」と呼ばれる方法で、牧草地を移動しながら家畜を肥育する[4]。それぞれの宿営地では、毎朝ヒツジとヤギの群れ、ウシの群れを別々に放牧し、夕方になると家の周りに戻す「日帰り放牧」をおこない、宿営地付近の牧草が尽きたら別の宿営地へ移動するのである。

移動は、原則として行政区域（郡）[5]の範囲内に限られる。社会主義時代に農牧畜業が集団化された際、統廃合を繰り返すなかで現在の地方自治体の基盤となる行政区域が定まっていった。現在のマルチン郡の領域が定められたのは1925年のことで、南北約100km、郡域は4,072km²におよぶ。春は北側のオブス湖畔から南に広がるミネラル豊富な牧草地に宿営地を構える世帯が多く、夏にはそこから50kmほど南下し、郡の中心地（定住地）の南側にそびえるバヤンハイルハン山中の森林地帯または山麓の河畔で水分と牧草を十分に家畜に与えながら宿営する。秋には再び北上してオブス湖畔で家畜を太らせたのち、10月中旬から下旬にかけて雪の降る前に、バヤンハイルハン山を越えて直線距離で60～70kmほど南下し、山の南側斜面で越冬する。そして、春の出産をそこでおこなったのちに、雪解けと同時にオブス湖周辺の春営地へと再び出発する。

地下水を利用するための井戸、湧き水といった水資源や、牧畜作業の拠点となる家畜囲いといった諸施設が宿営地選択の根拠となるために、季節移動のなかで利用する宿営地は基本的に定まっている。とくに春や冬の宿営地には防寒施設が建てられ、移動拠点が固定化している。冬には－40度に達すると同時に、家畜の出産期でもあるため、母畜と子畜を守る必要性から、春営地、冬営地における固定の畜舎の利用は重要である。ただし、夏と秋には、本格的に宿営を始める前に河川および湖の付近で集中的に家畜に水分を与えるために短期間滞在するキャンプを挟む（後述するように「オトル」と呼ばれる不規則的な移動牧畜）世帯が多いため、基本となる移動回数は年に6回である。マルチン郡で筆者が観察した季節ごとの宿営地の位置関係を図示しておこう（図3）。

多様な植生を利用した上記のような移動のパターンは、湖やその周りの土壌、山岳地帯の森林、河川、平地の乾燥ステップ、そして冬季の降雪量の多さといったマルチン郡の植生・気候に応じた牧地選定と利用の結果である。宿営地の

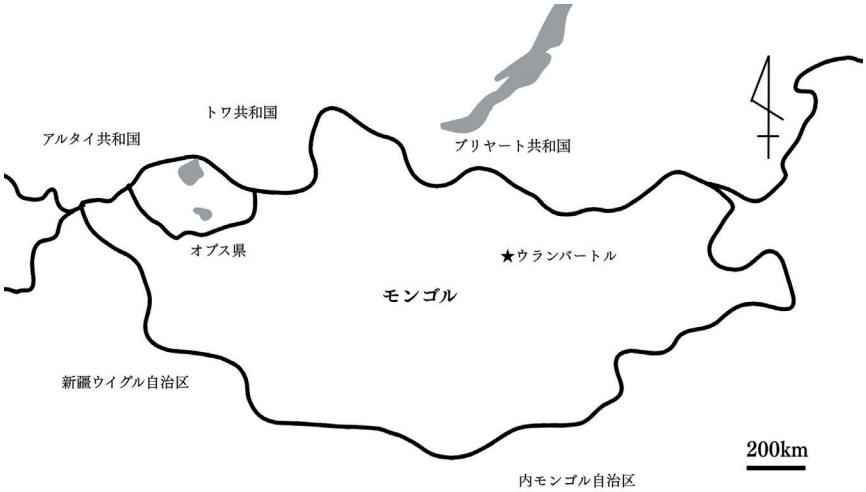

図1　オブス県の位置

4　ただし、ゴビ地域では、より頻繁に移動を繰り返すなど、宿営地移動のパターンには地域差があるともいわれている（Mearns 1996: 311; 尾崎　2019：83-93）。宿営地移動の頻度や、固定的なパターンの有無などによって、典型的なモンゴルの牧畜システムを決定することは不可能である。

5　モンゴルの行政単位は、国の下位にある県（*aimag*）、さらにその下位の郡（*sum*）に分けられる。国内は21の県に、各県は15~20程度の郡に分割され、自治の単位となっている。郡はさらに4つ程度のバグ（*bag*）と呼ばれる集団に分かれている。

移動パターンが固定的になりやすい森林地帯（ハンガイ）と、ランダムな宿営地移動が目立つ平地やゴビの間の差異をはじめとして、植生や自然環境、社会環境によって牧民たちの移動のあり方は多様であり、一般化することはできない（尾崎 2019: 83-93、Sneath 1999b: 233-264）。

2. ネグデルによる近代化とリスク管理

社会主義時代、農牧業の集団化がおこなわれ、農牧畜協同組合（ネグデル）および協働グループであるブリガート（*brigad*）およびソーリ（*suur'*）が編成された[6]。この集団化は、革命期（1920 ～ 30 年代）の教条主義的な政策や、戦後の計画経済（第一次五ケ年計画）における急激な集団化政策の失敗を経て成功したもので、1950 年代（第二次五ケ年計画）に開始され、1960 年までにはほぼ達成されている（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1998a: 323-324、1998b: 96-100; 140-147、富田 2012: 375-376）。各地で設立、統廃合されていったネグデルの管轄は、現在、県の下位にある地方自治単位である郡（*sum*）の管轄にほぼ重なる。ネグデルのメンバーは共有の家畜を分業して肥育し、家畜の個人所有は制限されていた。ブリガードはその下位の行政区であるバグ（*bag*）に相当する。ソーリは牧畜労働の末端組織で、家畜の種類ごとに専門的な牧畜をおこなう協働単位であった。行政、教育、衣食住や医療の提供を含む福祉も担い、地方自治体としても機能していたのである。

国の政策はネグデルを介して末端のソーリまで伝えられ、農牧畜業の近代化、機械化、産業化がおこなわれた。1930 年代に家畜に快適な畜舎の建設、飼料の備蓄、井戸の建設といった固定的な施設の利用が推奨され、獣医学の導入やさまざまな技術の利用といった近代的諸方法が導入された（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988a: 342）。畜産物を加工して都市部へ販売する設備やシステムをもち、食肉や乳製品、柔毛製品を生産する。自動車が導入されてからは、ネグデルの所有するロシア製のトラックを共同利用し、季節移動がおこなわれていた[7]。

モリス・ロッサビは、遊牧民から国会議員となった故ナムハイニャムボーの語りから遊牧民の経験した社会主義を記述するなかで、ネグデルによる牧畜業の近代化を「普通の遊牧民の直面するリスクを軽減したことは疑いない」と端的に評価している（ロッサビ 2007: 151）。自然環境の変動によって元来不確定要素の多い遊牧という生業様式において、リスクや被害に対する保険として国家の政策やネグデルが機能していたのである（ロッサビ 2007: 152）。また、熟練の牧民や

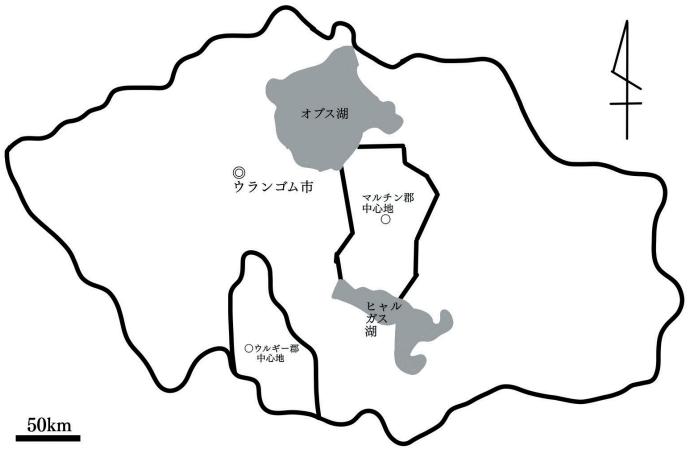

図 2　マルチン郡とウルギー郡の位置

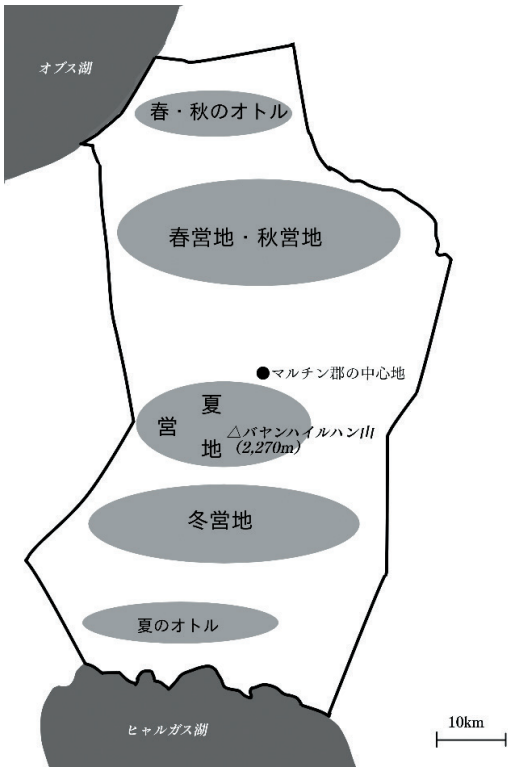

図 3　マルチン郡における基本的な宿営場所の位置関係

6　社会主義以前には、親族関係を中心とする協働集団である「ホトアイル（*hot ail*）」が編成されていたという（小長谷ほか 2018; Sneath 1999a: 174-175; Mearns 1996）。

7　ネグデルが所有するトラックによる移動についての記述は、筆者がマルチン郡でおこなった聞き取り調査による。

人望のある人民革命党員からなるネグデルの指導層が「水や牧草地をネグデルの成員に割り当て、飼料用の草刈りなど共同作業の段取りを決め、生産効率を上げる新技術や方法を提案」していた（ロッサビ 2007: 151）。こうした熟練者の経験値が、機械化や近代化と同時に牧畜に導入されていたこともモンゴルの牧畜業の集団化が「成功」した要因であろう。固定施設によって移動パターンが固定化されていく一方で、家畜を季節の状態や草の生え具合を考慮して移動させること、夏季には体力をつけさせること、冬季の寒害に際しては遠隔地のよりよい牧草地へ移動するといった伝統的で機会主義的な移動、そして牧畜にまつわる知識、技術も併せて用いることも推奨された（モンゴル科学アカデミー歴史研究所 1988a: 342）。近代的技術と伝統的かつ機会主義的な牧畜戦略を併せて用いたことにより、畜産物の生産量は増加していったのである[8]。ネグデルによる牧草地の割り当ては、家畜頭数が増加するなかで牧草地利用を効率化、安定化させるはたらきも果たしていただろう。

3. 協働・移動の規則性／不規則性とリスクの個人化

1991 年の社会主義体制の放棄および民主化への移行は、それに伴うネグデルの解体と家畜の私有化によって、モンゴルの牧畜に大きな変化をもたらした。先行研究は、民主化以降の牧民たちの実践に現れた変化を、上記のような社会主義時代の安定性を志向する牧畜のあり方と対照的に評価してもいる。国営企業、国営工場等の廃止による失業者の発生と、ネグデルが所有していた家畜の個人への分配によって、牧畜を営む世帯が増加した。そのなかで、メアンズや、フェルナンデス=ヒメネツは他者の利用する牧草地に新規参入の牧民が無秩序に侵入したり、一か所に牧畜世帯が集中するといった牧草地の奪い合いが生じるようになったことを報告している（Mearns 1996: 329-331, Fernandez-Gimenez 1999）。また、ネグデルからの給料によらず、牧畜によって生計を立てなければならなくなった牧民たちは、高値で取引されるカシミアを重視してヤギを多く肥育するようになった結果、「牧草を根こそぎ食べる」ヤギの頭数増加が牧草地の荒廃を招いたといわれている（ロッサビ 2007: 158）[9]。環境のよい場所にある固定施設を分配されたことで有利になる牧民や、市場経済のなかでの取引や家畜頭数の増殖に成功して大規模な牧畜をおこなうようになった富裕牧民と、生計を立てられずにリタイアしていく牧民たちとの間の格差も広がっていった（ロッサビ 2007: 159-161、風戸 2009: 144-155）。

移行期の社会経済的状況を背景とする上記のような変化は、「コモンズの悲劇」（Cf. Hardin 1968）といった用語を伴ってネガティブに評価された。メアンズは、牧畜戦略や宿営地選択において諸個人の裁量が認められるようになり、反対に牧草地利用における集団的規範の維持、およびローカルな集団内で潜在的におこなわれていた諸制限に必要な制度的安定性（institutional stability）は不在になったと述べている（Mearns 1996: 330）。自然環境の不確実性と社会的諸制度の不安定性をめぐって、牧畜業の民営化によって生じた脆弱性に対する評価は、1999 年、2000 年、2001 年に生じた大規模な寒害（*zud*）によって決定的なものとなる。ネグデルによる支援のない状態で、寒害に対応できずに多くの牧民が大量の家畜を失った[10]。

これをうけて、政府は牧民の数を減らしたうえで協同組合をつくり、都市近郊に定住しながら牧畜をおこなうリスク対策計画や、放牧地の私有化などを提案したが、メアンズら国外の研究者からは牧畜業の機動性を維持すべきであるという反論がなされたという（ロッサビ 2007: 164）。風戸真理は、モンゴル北東部に位置するドルノド県における事例としてネグデルの民営化直後、1990 年代初頭に、家畜を共同で管理し、牧畜労働の分業や、畜産物の流通、物資や現金による利益分配といった相互扶助を目的として諸世帯が任意で加入する小集団であるホルショー（組合）やカンパン（会社）が設立されていった経緯を報告している（風戸 2009: 145-155）。しかしこうした取り組みも、諸組織の資産の規模が小さかったことや、利益分配が少なかったこと、農牧業の振興よりも目先の利益が優先された等の理由でその後 10 年で解体されるに至ったという（風戸 2009: 151-152）。そして、牧民たちのうち経済的有力者たちは市場を強く志向する利益

8　デビッド・スニースは、社会主義革命から 1930 年までの間に家畜頭数が顕著に増加している原因として、封建的社会制度が崩壊し、寺院や領主といった大家畜所有者が没落し、家畜が牧民世帯に再分配される過程で、牧畜経済において利益指向から生業指向への移行が生じ、輸出が減少したためであるとしている（Sneath 1999b: 231-232）。また、尾崎孝宏は、上記の指摘をうけて、当時の体制による行政区画、すなわち宿営地移動範囲の細分化が、「生業指向の高まりとともに長距離移動へのモティベーションを失いつつあった牧畜社会の状況とは矛盾の小さいものであった、と予想される」と述べている（尾崎 2019: 30）。

9　生態学的調査によって、他の家畜に比してヤギだけが牧草を「根こそぎ」食べるという事実はないという報告もされている（藤田ほか 2013：141-148）。しかし、当時牧民たちの間でこうした言説が広まっていたようである。筆者もモンゴルに滞在中、しばしば同様の話を耳にした。

10　1990 年に約 2600 万頭であった国内の家畜頭数は 1999 年までに約 3400 万頭に増加したが、2 年連続の過酷な冬を経て、2002 年には約 2400 万頭に落ち込んだ（NSO 2018）。

重視の牧畜を目指すようになり、またその他の牧民たちも経済活動における自律性を重視する結果となった（風戸 2009: 154）。

民主化以降の牧民経済の混乱に際して、時の為政者はネグデルと同様に定住を基礎とする管理システムのなかで、いわば定住民的思考に基づいた牧畜産業システムを構築しようとした。しかし政府側の提案は実現せず、現在でも地方部の県レベルにおいて牧民世帯の割合は総世帯の約 3 分の1程度、郡レベルでは半数以上を占めており（NSOM 2018）、かれらは固定施設や定住地における社会的・経済的諸機能に頼りながらも、定住民的思考の範疇に収まらない暮らしを維持している。為政者側も牧民による機動的な牧畜戦略を許容し、本論で後述するように、オトル的な移動にも対応可能な管理方法を実践している。結果として、今日に至るまで牧畜におけるリスクの所在は牧民諸個人に帰するものであり、かれらは不確実な自然環境と現代の市場経済を諸個人、もしくはローカルなつながりのなかで築かれている牧民の知を用いて生きている。

ローカルな協働に関して多くの先行研究が共通して指摘したのは、親族を中心として構成される協同集団である「ホトアイル（*hot ail*）」が再び現れたことである（e.g. 尾崎 2019: 33; 上村 2017; Mearns 1996: 322-323）。モンゴルにおいて、社会集団の最小単位は、基本的に核家族と一つのゲルからなる単独世帯である。一方で、ホトアイルとは、世帯主の親族、友人、知人関係をもとに複数世帯が一か所に宿営し、家畜の群れを共同で管理する単位となる。日帰り放牧を交代でおこなったり、毛刈りや燃料としての薪集め、季節移動等を共同でおこなうことで労働の負担を分散させていた。また、ホトアイルは社会的セーフティネットの役割も果たす。ただし、本章第1節で示した季節移動パターンの多様性と同様に、ホトアイルを構成する世帯の数は、たとえばゴビ地域では3世帯程度であるのに対して、世帯が密集しがちなハンガイ（森林）地域では 10 世帯に上ることもあり、植生や地形等によって多様である（Mearns 1996: 311）。ホトアイルは、国家の管理体制が消失した後、生業的におこなわれるようになった牧畜様式を支える機構であったが、その一方で、協同集団としてのホトアイルの構成原理や移動の範囲、パターンは基本的に集団化時代のあり方を引き継いだものである（尾崎 2019: 33）。しかし同時に、ホトアイルの構成はそのときどきの状況に応じて離合集散しながら変動するものであり、つねに一定でないことも指摘しておく必要がある（e.g. 風戸 2009: 95-96）。

近年ではより機動的、個人主義的で不規則な、現代の牧民たちの実践が注目されるようになった。先に尾崎の指摘によりながら述べたように、気候、地形、植生や文化的な差異から、諸地域の季節移動のパターンは一般化することができない多様性を有している。とくに、季節移動のシステムには、そもそも不規則な移動が組み込まれている。自然環境・社会環境の変動への反応として現れる機動的または変則的な移動は、概して「オトル（*otor*）」と呼ばれている[11]。これは、前述したように社会主義的近代化に際しても政府が産業化にともなって移動パターンの定型化と同時に、推奨して生産性の向上を図ったものであり（Murphey 2011: 240）、集中的な肥育やケアを想定している。

オトルについての博士論文を執筆したダニエル・J・マーフィは、オトルを季節移動のパターンと異なる「非慣例的な移動戦略」（non-customary migration strategy）と定義している（Murphy 2011: 405）。さらにマーフィは、サテライト・キャンプを設けて短い距離を断続的に移動する「短いオトル」と、長期間（1季～2年程度）にわたって、ベースキャンプごと長距離移動してしまう「長いオトル」とを区別した。オトルの目的は、①ゾド（寒害）やガン（干害）といった災害から逃れること、②厳しい冬や春を乗り越えたあとで家畜をケア／リカバリーすること、③越冬に備えて夏や秋に家畜を太らせることであると説明されている（Murphy 2011: 384）。筆者が調査地に滞在していた間も、これらの目的で、季節移動のパターンから外れる移動はおこなわれていた。ただし、調査地で筆者が観察した状況から補足するならば、①の災害時における臨時避難は、遠隔地に長期間滞在する「長いオトル」のかたちをとる一方で、②や③の家畜のケアやリカバリーは「短いオトル」として通常の季節移動の間に組み込まれ、適宜おこなわれているため、後者は全く「非慣例的（non-customary）」な実践というわけではないだろう。ゴビ地域では秋季に短い期間で点々と放牧地を移動するオトルが恒常的におこなわれており（e.g. 風戸 2009: 67）、③のような家畜のケアの手段としてのオトルは、季節移動システムのなかにすでに組み込まれている。恒常的に用いられている季節移動に対して、臨時的なオトルが位置付けられるというよりも、モンゴルの牧畜が多様な原理を柔軟に活用しながら営まれているものであるとい

11　見知らぬ土地に避難する際などには「土地を探す（*nutag khaikh*）」、夏季に家畜を湖畔に連れていき、短期集中的に水分を与える場合には「湖に行く（*nuur ruu yawakh*）」などと具体的な行為に言及して説明することもあるが、後述するように、学術的な分類としてはオトルに含まれると考えてよいだろう。

えるだろう。

前節で取り上げたマーフィの議論にも、宿営地移動の観点から牧畜の営みをより多角的にとらえる視座がみられる。マーフィはオトルの実践に注目するなかで、牧民たちの移動が、より肥沃な牧草地へ移動する必要性と同時に、そのとき利用している牧草地を発つ必要性に動機付けられていることを指摘する（Murphy 2011: 387、強調は筆者）。牧民たちが宿営地移動という実践のなかで重視するのは、次の宿営地の見極めであると同時に、そのとき利用している牧草地を利用し尽くし、次へ移るタイミングの判断である。そして、マーフィによれば、その宿営地を発つか否かの考慮は、新しい牧草地の状態であると同時に牧民たちが直面する移動そのもの（*nuudel* itself）と関わっている（Murphy 2011: 387）。

また、マーフィの定義に対して、上村明はオトルを移動パターンの変則性ではなく、諸世帯の成員やゲルの可変性という社会的側面から分析している（上村　2017）。上村は、オトルがさまざまな実践を含んでいるために、地域や諸研究者が観察した事例によってさまざまな定義が生じており、外延的な規定が難しいことを指摘し、オトルを「牧畜の定の目的のために、牧畜世帯を構成する家畜、住居、成員からその部分を減算する」原理に基づいた実践であり、「牧畜のために世帯の一部を犠牲にすること」につながるものだと定義する（上村 2017: 18、強調は筆者による）。オトルをおこなう際には、機動的な移動をおこなうために、通常サイズのゲル（直径約6m）よりも小さなゲル（直径約5m）を用い、宿営地へ持参する家具も最小限のものにとどめる。ときには世帯の成人男性のみがヒツジとヤギの群れを伴ってオトルにでかけ、女性はウシの放牧と搾乳をしながら通常の宿営地や、定住地に残るといった分業体制をとることもある。核家族を基本とするモンゴルの世帯構成において、そこから何らかの要素を差し引くことで家畜の肥育に資するキャンプを構成するというのが、上村の考えるオトルの理念である。そして上村は、家畜の頭数が増加し、自動車の所有によって移動手段が個人化した結果、移動の規模が縮小し、ホトアイルによる多様な世帯間協働から、単独世帯あるいはそこからさらに何らかの要素を減算することで生じるオトル的な世帯構成へと牧畜のモードが移行した調査地の状況を指摘している（上村 2017: 30）。

4. 本論の問題意識 —生活世界からみた移動実践

ここで注目したいのは、自然環境・社会環境の変動とオトル的な居住集団構成の変動の相関関係を認めながらも、牧民たちの世帯構成の「契機」となるのはマクロな生態的・社会的条件よりも、ミクロで直接的な出来事であるという上村明の主張である（上村　2017: 29-30）。上村は、上記のような環境への適応戦略の結果としての世帯構成や移動をめぐる従来の理解について、「一般的」なものであり、「事象の出現可能な範囲を規定する」ものの、実際の実践における選択の局面では、家族の事情や生活上の便宜、その時の気候条件といった個別的で特殊な事情が参照され、牧民たちを移動や種々の世帯構成へと向かわせている可能性を指摘する（上村　2017: 29）。

たとえば上村の調査地では、近年、牧畜世帯の変則的な構成が増加しているという。その社会・経済的な背景として、私有する家畜の増加によって複数世帯からなる大きな牧畜集団が構成しにくくなったことや[12]、自家用車所有世帯の増加によって、世帯ごとの都合に合わせて機動的な移動が可能になったことが挙げられる（上村　2017: 28-29）。自動車の所有や駆動のための給油には一定の経済力が必要であり、自動車の修理技術も要する。移動手段をもたない場合には、移動するたびに頼ることのでき、自動車を所有する親族や友人の存在が不可欠である。子どもの就学によって郡の中心地で暮らすようになった世帯が、世帯主の父に所有する家畜を預託し、世帯主自身も一時的に父のゲルに同居するかたちで牧畜労働をおこなうオトルの事例も紹介されている（上村　2017: 25）。筆者自身も、マルチン郡で、就学や就労、出産や療養等の事情で草原と定住地に拠点を分けたり、両者の間を往還するかたちでオトル的に宿営地を構成する牧民世帯を多く目にした。こうした社会経済的諸条件も、個別の移動実践の多様な在り方に大きく影響するようになっているのである[13]。前節で挙げたように、マーフィの指摘する宿営地移動に影響を与える諸要素は、牧草の状態や水の質・量、気候といった生態的諸条件に加え、家畜の状態、移動手段、移動にかかる労働力、物資やサービスへのアクセス、市場との距離、家計等の諸状態であるが、これらは上村

12　近隣の世帯間でおこなわれる労働交換には、家畜の毛刈りおよび子畜の去勢にともなう協働作業、搾乳のための母家畜の相互預託などがある。上村明によれば、近年ホトアイルを構成せずに単独で牧畜をおこなう世帯が増加している。牧民たちは毎日「日帰り放牧」をおこない、ヒツジ・ヤギを一つの群れとして管理しながら肥育するが、群れを管理できるサイズの上限が千頭ほどであり、各世帯の所有するヒツジ・ヤギの頭数が増加したために、ホトアイルが構成できなくなっているのである（上村 2017：28）。

13　ただし、宿営地移動が自然的諸条件への適応よりも社会的諸条件への対応を動機として行われているという見方は行き過ぎであり、前者と後者の動機が同時に加味された結果として、宿営地の移動が決定、実行されているという方が適切であるという上村の指摘も、併せて記しておきたい（上村 2017）。

が牧民が宿営地を構成する諸条件として指摘している社会的経済的状況と重なる（Murphy 2011: 388-398）。

移動は自然環境の不確実性に対応するための生産上の戦略であり、牧民たちにとって、オトルはそうした機会主義的・戦略的な移動を機動的におこなうことに特化した実践であるという理解は、モンゴルの牧畜における移動の必要性や効果を説明するに十分である。しかしその一方で、より個別で具体的な選択の局面を注視することを促す上村やマーフィの議論は、環境のサステナビリティや労働集団の構成といった牧畜システム全体の解明という目的の背後で議論の俎上にあがることのなかった、移動のただなかで揺動する牧民たちの生活世界に光を当てることにつながっている。この点は、移動へと向かう牧民たちの生のあり方を記述しようとしている本論の目的にとって示唆的である[14]。

ただし、こうした諸事情が「多種多様なリスクを生み出す」（Murphy 2011: 387）ものであり、オトルもまた環境に適応するための「戦略」であると意味づけるマーフィに対して、上村は上記のような営みを、選択肢のリストを評価し決定するような自然環境や社会環境への「適応戦略」に対置する。かれらが「『とりあえず』（ヒューリスティックに）でも移動しなければならない」（上村 2017: 29）場面が多いという実感から、上村は牧民たちが、人の認知を超えた自然・社会・経済的な諸環境の総体のなかで、探索、対話するなかで居住集団の構成や移動を決定していると考察する（上村 2017: 30）。上村のこの見方は、ティム・インゴルドによる採集狩猟民の資源獲得行動原理にヒントを得た、固定的、直線的でない生のセンスのあり方についての議論によったものである（上村 2017：31、インゴルド 2014、Ingold 2000）。

インゴルドに基づく上村のこの見方は、遊牧という生業・生活様式からくるモビリティへの関心を超えて、不確実性のなかを生きる現代の人びとの生活世界をめぐる人類学的知見へと通ずる。たとえば、『リスクの人類学』においてマダガスカルの漁民たちの生のあり方をリスクという視点から考察した飯田卓は、専門的知見によっては計ることのできない個々の漁師たちのブリコラージュ的能力、裁量のなかに「リスク計算に基づいて調整をおこなう仕組みとは別に、状況を総合的に判断しながら個人が問題解決する余地を残しておく」姿勢を見出し、それがリスク対策システムとは異なる「生活者感覚」であると述べる（飯田 2014: 282）。同書のなかで、編者の市野澤潤平と東賢太朗も、生活において諸要素の利害を測定、比較検討するような「リスク計算」の不可能性を指摘し、計算の範疇外にある在来知をリスク・コンシャスな社会のオルタナティブとして探求する必要性を提起している（東ほか 2014: 130, 236）。このような生活者感覚における計算の不可能性について、先に挙げたインゴルドも同様の見解を述べている。すなわち、採集狩猟民的な生のあり方において、「諸アクターの日々の決定プロセス」において動員されている知は、所与の問題の完全な解に最短経路でたどり着くためのアルゴリズムのようなものではなく、もっと曖昧で身体的な「経験則」である（Ingold 2000: 35）。

リスク計算の外にある生活者感覚が、問題の解という目的地にたどり着くためのものではなく、「日々の決定プロセス」（飯田はこれを「小さな決断」（飯田 2014: 282）と呼ぶ）のなかに位置付けられるものであるという視点のとり方は、本論にとっても有効である。本論もまた、かれらが生きているのは、リスク管理という目的論的で直線的な営みとは別の方向性を有している、モビリティに基づく生活世界であるという視点に立つ。安定性（stability）の原理に基づくリスク管理的なものの見方のみでは、モンゴルの人びとの生活の内部に息づくモビリティを理解することができないと考えるからである。そしてそれは、不確実性を減少させてより確実な未来を志向するというよりも、不確実性からまた別の不確実性へと歩みを進めるような営みでもある。それは「とりあえず」の行動が積み重なった軌跡であり、「小さな決断」が連なったプロセスといえるだろう。本論では、上記の観点から、モンゴルの牧民たちがいかに移動しているのかを具体的に記述することで、将来の安定的資源獲得や経済的状況の向上という目的の達成を必ずしも目的としないような、牧民の生のあり方を明らかにしていく。

Ⅲ 社会的協働からみる宿営地移動の一回性

先に述べたとおり、本論はモンゴル国オブス県のマルチン郡およびウルギー郡において、2016 年 11 月から 2017 年2月

14　オトルに限らず、モンゴルの牧畜全般について、「第一義的には生活を維持するためにおこなうものである以上、場合によっては長期的な持続性よりも短期的な生活の維持を優先することがあり得る」（尾崎 2019：38）のであり、生態的安定性の保持と結びついた牧畜システムのみならず、社会的諸制度や牧民個人のおかれた諸条件を考慮すべきであるという指摘は少なくなく（尾崎 2019：39）、今日の人類学的研究においては定石であるともいえる。

までの間に実施した調査に基づいている。この調査は、2014年11月から2017年3月までの間、のべ27か月にわたってマルチン郡を中心におこなった長期調査の一部であり、筆者は、2015年12月より滞在していた、ボヤンという名の牧民と妻、子どもからなる世帯に滞在し、調査をおこなった。マルチン郡は南北を湖に挟まれているために冬の降雪量が多いことで知られており、また緯度の高さから気温も冬季には −40度に達する。冬営地のほとんどが中央部に連なる山並みの南側に設置されているが、本論のもととなる調査をおこなった2016年から2017年にかけては、この冬営地に雪が多く、利用できる牧草地が限られてしまっていた。そのため、マルチン郡から避難して他の暖かい郡に冬営地を構え、越冬した世帯が多数あった。筆者が帯同していたボヤン家は、計35世帯が臨時避難的に冬営地を構えたウルギー郡で越冬した（図2）。本章および次章では、その冬の出来事を記述していく。

1. ボヤン家の社会・経済的背景

ボヤンは30代の牧民で、9人兄弟姉妹の末の男子である（図4）。400頭弱の家畜を所有し、マルチン郡のなかでは平均的な規模の牧畜を営んでいる。兄弟姉妹はみなマルチン郡の中心地やウランゴム市、ウランバートルに暮らす非牧民であり、そのなかでもマルチン郡の中心地に暮らしていた長兄のAG（50代）と、最も年の近い兄のJG（40代）、3番目の姉のEH（40代）、そしてウランゴム市に暮らすBS（50代）、がボヤンをよく助ける家族であったが、当時のボヤンは総じてこれらの家族から支援を受けにくい状況に置かれていた。

ボヤンは基本的に単独世帯として牧畜を営んでいる。ボヤンの妻バダムの両親は健在で、マルチン郡で牧畜を営んでいる。バダムには3人の弟がおり、それぞれ結婚後独立して牧畜を営んでいるが、両親とホトアイルを構成しつねに4世帯の協働体制をとっている。モンゴルでは父系の理念があるが、日常生活においては共時的な横のつながりが強く現れる。妻方の親族とホトアイルを組むこともあり得ることだが、ボヤンはバダムの両親、弟たち各世帯からなるホトアイルに参加したことはない。

以前は兄であるJGとホトアイルを構成していたが、JGの妻が病気をしたのをきっかけに、JGの生活拠点はマルチン郡の中心地へ移動した。JGの家畜は14歳の息子が世話をし、彼自身と妻は中心地で仕事をしながら、休日等を利用して通いで息子と家畜の様子を見に行く。JGはしばしば、ボヤンのゲルの近くにサイズの小さなゲルを建てて息子をボヤンに帯同させ、ボヤンと自身の家畜を統合したうえで息子に放牧させていた。しかし、基本的にはJGと妻が通うことのできるよう、積雪で移動が困難な冬には、二人のいる定住地に近いところに冬営地を構える必要がある。そのため、JGの家畜および息子は、この冬ボヤンとは別行動をとることが、早期に明確になっていた。

マルチン郡の中心地に暮らすボヤンの姉EHは、自己の所有する家畜をボヤンに預託していた。EHの夫はトラックを所有し、定住地で賃金労働をしていたために、さまざまな場面で移動手段、労働力の提供や経済的援助をおこないボヤンを助けていが、彼が2014年秋に急逝し、ボヤンとEHの間での互酬的な相互扶助の関係は崩れつつあった。マルチン郡の中心地から陸路で約120kmの地点にあるオブス県の中心地ウランゴム市に住む兄のBSと姉のPSは、頼りになる存在だが物理的な距離がある。加えて、夫を亡くしたEH

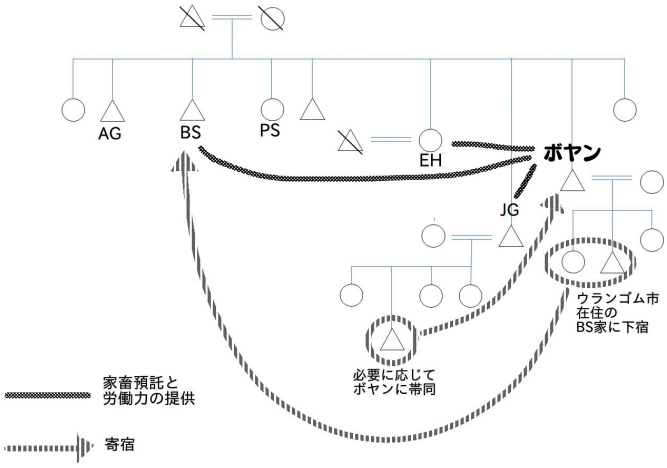

図4　ボヤンの親族関係

に親族は経済的支援をしていたために、ボヤンの経済状況も当時はひっ迫していた。

上記のようなボヤンのおかれた状況は、自然環境や社会環境の不確実性を個人としての牧民が引き受け、対応していく現代モンゴルの牧畜をめぐる社会的背景に位置付けることができるだろう。そんななかで、2016 年の秋から、冬の降雪量の多さとゾドの心配が噂されていた。最終的に、ボヤンは牧民の友人であるバト、ゴンボ兄弟を頼り、彼らと共にオブス県南部のウルギー郡で越冬することになった。これはマーフィのいうところの「長いオトル」である。

ボヤンと共に行動することになったゴンボとその兄バトは、それぞれ千頭の家畜を所有する富裕牧民で、つねに二人でホトアイルを構成しながら牧畜をおこなっている。ボヤンとは親族関係はないが、兄弟姉妹との関係の弱いボヤンに対して、牧畜の知識や情報を与えるなど、身近な助けとなってきた存在である。かれらは 20 頭余りのラクダも飼っているため、日ごろから自動車ではなくラクダで季節移動をおこなっていた[15]。ゴンボとボヤンの関係は、ゴンボによるボヤンの後見や労使関係というものではない。しかし、バトの妻が筆者に対して語ったところでは、両親をすでに亡くしたボヤンの兄弟がみな非牧民であり家族とのつながりが弱いなかで、ゴンボやバトはかれらの両親も含めて、家族のように心配をし、力を貸してきたとのことで、近しい友人を超えて頼り、頼られる関係であるといえた。日常生活のなかでは友人同士の気楽なやりとりが目立つが、ゴンボとバトがボヤンよりも年上で、弁の立つ男たちであったため、ボヤン家に立ち寄るゴンボ、バトとのやりとりにおいて、しばしば二人の兄弟のリードや指示はボヤンの行動を先導していた。家畜を売りにゴンボが隣県へ出かけた際には、ボヤンがゴンボの家畜を預託され、2週間にわたって管理した。ボヤンの妻バダムも、ゴンボやバトの妻たちを慕っており、三家の関係は良好であった。

2. 一回的な出来事としての移動

オトルに先立って、ボヤンはつねに移動手段を心配しなければならない状態にもおかれていた。EH の夫が所有していたロシア製のトラック（*uaz*）は、韓国や日本製の2tトラックの所有が広がっている現代モンゴルにおいても、地方部を中心に牧民世帯の宿営地移動・畜産物運搬で中心的な役割を担う自動車である。このトラックが使用できなくなったことにより、ボヤンは 2016 年の夏にゲルの柱を切断して小型化し、JG から譲り受けて自己が所有するロシア製ジープ（*jaran yüs*）でも季節移動が行えるようにしていた。しかし、雪の多い冬季は、ジープの馬力では荷の運搬が困難である。JG が息子の暮らす小さなゲルを運搬するときには、JG の所有する日本製の SUV 車（中古のパジェロ）を用いるが、ボヤン家のゲルや家財道具を運ぶには馬力やキャパシティが足りない。友人の一人としては、日頃から付き合いがあり、定住地に暮らす JY を頼ることができた。ボヤンが定住地を訪れるときには必ずといってよいほど JY 家に泊まるなど、ボヤンが最も信頼する友人として JY を位置付けることができる。JY は運転手として活動しているためにトラックを所有しており、定職にもついていないことから、前年の冬には都合をつけてボヤンの宿営地移動の準備や荷の運搬を手伝うなど、協力関係があった。しかし、彼の所有するトラックが故障していたために、2016 − 17 年の冬季にはボヤンに力を貸すことができなかった。

【事例1】

ボヤンは 11 月4日早朝に自身の秋営地を出てマルチン郡を訪れ、運搬を手伝ってくれる人物を探した。ゴンボ、バトと落ち合ってラクダで越冬先へ出発する予定であったために、自身の車はウランゴム市の兄 BS 宅に置いてしまったあとであった。

人手は見つからず、午後になって、ボヤンと JY が連れ立って姉 EH の家を訪ねた。彼らは EH 自身の支援というよりも、彼女の友人で SUV（中古のホンダ H-RV）を所有する女性に車だけ貸してもらうよう頼めるか聞くためであった。しかしその女性は、冬は運転せずに車はガレージにしまってしまうのだと EH から聞かされた。EH は代替案として、トラックを所有する別の友人男性に宿営地移動の手伝いを依頼することを提案した。ボヤンはそれに応じ、EH は一度友人の携帯に電話をしたが、つながらなかった。しばらく待ったが折り返しはなく、ボヤンと JY が諦め、もし折り返しがあれば知らせてほしいこと、二人は別の車を探しに出かけることを伝えて EH 家を辞そうとしたときに、EH の電話が鳴り、彼女は二人を引き留めた。電話で事情を話し、トラックを出すことができると答えた友人男性に対して、EH は「嘘を言わないでね、私の弟が移動するのよ」と約束が必ず実行されるように念を押し

15　近年では、自動車所有の増加により役畜としてのラクダを所有する世帯は減少しており、ラクダで季節移動をおこなう世帯は希少である。

た。そして、次にガソリンスタンドを営む別の友人に電話をかけ、スタンドを閉めて外出中であるという店主に「必ずあんたのところで〔ガソリンを〕買うから」、「あとで迎えに行く」と約束をとりつけた。

夕方5時ごろ、トラックを所有する友人がもう一人働き手となる友人を連れてEH宅を訪れた。集合した一行は食事をすると6時前に出かけ、ボヤンの秋営地からオトルに向かう中継地点までの移動をおこなうことができた。

EHの行動は、長いオトルに出かけることの非日常性や、彼女自身の手助けによってボヤンの移動を実現させようとする気負いを示していた。事前にEHに対する相談はなく、友人女性の運転する乗用車はゲル等の荷を運ぶには機能面で適さないなど、ボヤンたちがやむを得ずEHに助けを求めなければならないほど、車を探すのに困っていたことが伺えた。ボヤンとEHの間では、当時金銭や労働力のやりとりをめぐって何度かの言い争いが起き、関係が良好でなかった。しかし、普段EHはボヤンの依頼に応えることができなければそれ以上の交渉をせず、そっけなく帰していたが、ここでは即座に代替案を提示し、実現させた。「嘘を言わないでね」という念押しは、モンゴルの日常生活のなか、運転手との約束が反故にされることもしばしばであるなかで、ボヤンを支援することについてのEHの真剣さを裏付けた。また、「必ずあんたのところで〔ガソリンを〕買うから」と、複数あるガソリンスタンドのなかから友人が営むスタンドを選んで話を付けた背景には、EHの家計の状態が悪いなかでガソリンを買う金が出せず、後払いで給油をしようという意図がある。最小限の手間と時間をかけて確実に給油をするための根回しであった。

このEHの行動には、モンゴルにおける宿営地移動という出来事に含まれている二つの側面が端的に現れていたといえるだろう。それは、過去と連続的な側面と、一回的な行為としての側面である。過去と連続的な移動は「交渉コストの削減」という点に要約できる。速やかに移動を実行するために、EHは自らの依頼によって動くことがある程度確かである自身の友人を頼った。この点で、このときの移動を過去から蓄積された関係やプロセスのなかに位置付けることができるのである。

それと同時に、移動その時点において、上記のような過去との連続性は一回的、偶然的なものとして現れていた。ボヤンが姉EHに対して期待したのは、友人女性からSUV車を借りるための交渉であった。結果としてボヤンの期待は叶わず、異なる解決策としてEHが提示した、別の友人たちによる手助けの手配は、ボヤンの意図する範囲外で実現していった。

もちろん、ボヤンとEHとの姉弟関係や、これまでの断続的な協働関係との連続性を背景として、彼女が出来得る限りの協力をおこなった行為は、全体としてボヤンの期待するものであったともいえる。また、ボヤンの期待する支援が実現しなかった時点で、代替的な提案をおこなうことは、EHに期待される対応であったという点で予期できるものであるともいえる。しかし、一度ボヤンと友人JYがEH宅を辞して別の車を探そうとしたことや、トラックを所有する友人男性に一度は電話がつながらなかったことに鑑みれば、この移動が実現した背後には、多数の別の可能性があった。経済的状況が芳しくないなかでも、EHとガソリンスタンドの経営者との友人関係がなければツケ払いでガソリンを購入するのが困難であった可能性もあった。また、EHとボヤンの間に関係の悪化があったことに鑑みれば、彼女の機動的な行動そのものも生じない可能性もあった。社会経済的背景からモビリティが不安定な状態にあり、それに加えて頼れる友人であるJYのトラックが故障したことで移動手段の不在に直面したボヤンが、宿営地の移動に至ったプロセスからは、牧民にとっての宿営地移動に、かれら自身がコントロールすることができない一回的で不確実な側面が伴っていることがわかる。そして、その不確実性に抗わず、その時点では確実かは分からない対処をさまざまに積み重ねることで自らの行動を実現していく、かれらの身構えが見出せる。

宿営地移動の開始当初、ボヤンと、落ち合った友人ゴンボ、バトら一行は、ウランゴム市の西部に位置するブフムルン郡で越冬する予定であった[16]。厳しい冬になるという予想をうけて、11月初頭にはすでに複数の世帯がブフムルン郡へ移動しており、ボヤンが11月4日にゴンボおよびバトと合流し、ブフムルン郡へ移動を開始したのが11月5日のことであった。しかし、11月4日夜から11月5日にかけて大雪が降ったために道が寸断されてしまい、一行は急遽行先を変更、ゴン

16　ボヤンは夏に骨組みを切断した小さなゲルと最小限の家財道具だけを携えてのオトルであり、妻と末娘、筆者を伴って越冬していた。妻バダムは、妊娠して2か月目だったが吹雪の中共に移動した。ゴンボは大きなゲルを定住地に所有する自身の土地に建て、臨月の妻をそこに残していた。そしてゴンボは小さなゲルと息子だけを伴ってウルギー郡へ来た。これは、上村のいうところの「減算」の原理による世帯構成であるといえる（注12参照）。一方で、バトは大きなゲルと妻、息子と親戚から預けられて居候をする二人の青年を伴ってのオトルであった。

ボとバトが 2013 年にもオトルで越冬したウルギー郡を目指すことになった[17]。ウルギー郡に降り立ったのは、11 月 15 日のことである。ボヤンは 2013 年のオトル当時にゴンボが宿営地を構えた場所にゲルを建てた。この場所はウルギー郡所属のある牧民が秋営地として所有、利用しているとのことで、家畜囲いを備えていた。所有者である牧民は、別の場所にある冬営地に移動した後である。

ゴンボは 2013 年当時にはバトが宿営した約 500m 先の別の牧民の秋営地にゲルを建て、二人は家畜を統合してホトアイルを組んだ。バトは約 3km 離れた丘の上にゲルを建てた。ボヤンとゴンボが、ゴンボによって既知の場所に宿営地を構えたことは、その宿営地の所有者との交渉コストが省かれるという点で過去に支えられたものである。その一方で、それはブフムルン郡への経路が断たれたことによる一回的で偶発的な出来事であったことは、言うまでもない。

Ⅳ 移動の不確実性とコミュニケーションの〈余白〉

上記でみたきたように、モンゴルの牧民たちにとって、宿営地の移動は、過去に構築された関係や経験をもとにした移動コストや交渉コストの削減によりながらも、そのときどきの自然環境や社会関係の状況に応じておこなわれるものである。

本章ではさらに、次の宿営地移動へと向かう準備期間にボヤンの移動の計画が二転三転した出来事に注目し、かれらがいかにして計画を変化させていったのかを具体的に追いながら、移動と不確実性を伴うかれらの生活世界の様相を明らかにしていく。

他郡で越冬する牧民が所属する郡と、越冬地を管轄する郡との間では、他郡の牧民による自郡の区域内での越冬を許可する契約（*geree*）が結ばれ、他郡から来て越冬する全世帯はリストで把握される（Cf. Murphy 2011: 445-452）。ウルギー郡にもマルチン郡の行政長らが訪れ、ウルギー郡で越冬するマルチン郡所属の牧民たちの宿営場所と家畜頭数の確認がおこなわれた。この調査をもとに計 35 世帯の情報がウルギー郡の行政長へと申告された。オトルの終わりには、申告した家畜頭数に応じた牧地使用料を、各世帯がウルギー郡へ納めることになる[18]。また、ボヤンがゲルを建てた数日後には、当の宿営地の所有者がボヤンを訪ねて顔合わせをした。ボヤンはこの所有者にヒツジを2頭屠って進呈した。

こうした契約や家畜の贈与等の慣行は、行政区によって牧民の移動が制限されている管理的な側面があると同時に、行政においても、諸個人間のローカルな方法においても、緊急時には行政区の境界を越えた移動を許容するような仕組みが構築されていることを示している。2003 年に施行され、2017 年に改正されたモンゴルの土地法においても、災害時には越境牧民を各自治体の任意で受け入れることができると明記されている[19]。

ウルギー郡の牧民や、近隣に他の郡からオトルのためにやってきた牧民たちと、ボヤンらの間では、種家畜の交換や家畜の売買といった交流が生じた（表1）。ウルギー郡で越冬していたマルチン郡所属の牧民のうち、半径5キロメートルほどの範囲に宿営地を構えていたのは、ほかに3世帯であった。そのうち、2km ほど南東に位置する2世帯は、父親（50 代）と息子夫婦（20 代）からなるホトアイルで、息子は3日に一度ほどの頻度でボヤン家を訪ね、情報交換や世間話をしていった。また残りの1世帯は、11 月中旬から放牧に出したまま宿営地に戻っていなかったボヤンの種ウシを見つけ、預かっていた。

本章で取り上げるふたつの事例は、冬が終わりに差し掛かり、マルチン郡へ戻る機運が高まり始めた1月中旬の出来事である。2月末のモンゴル暦の正月を控えマルチン郡の冬営地に戻って祝うという牧民たちの情報が行き交っていた。1月中旬には宿営地周辺の牧草も少なくなり、ボヤンとホトアイルを組んでいたゴンボは次の移動についてしきりに口にするようになった。また、ゴンボの家畜の間で病気が流行り、1頭の種オスを含む3頭のヤギが死亡するなど、家畜の状態が良くなかった。そのためゴンボは移動を焦っているようにみえた。

17　大雪の中、行先が未定の断続的な移動をおこなったため、筆者の帯同は断られ、筆者はマルチン郡の定住地で待機していた。移動中の出来事の記述は、道中にボヤンの姉 EH が電話でボヤンと話した内容と、後に筆者がボヤンとゴンボから聞いた内容がもとになっている。

18　ボヤンは、5万6千トゥグルク（約3千円）をウルギー郡に支払った。

19　2003 年に施行、2017 年に改正されたモンゴル国法律「土地に関する法律」（2017 年 2 月 2 日改正第 52 条 8 項）では、災害時の越境牧民の受け入れについて、各自治体が任意で決定することが定められている（EZMNS 2019）。

表 1　ウルギー郡で生じた主な交換・交流

時期	関与者①	関与者②	出来事
11 月初旬	マルチン郡長一行	ウルギー郡で越冬しているマルチン郡牧民	マルチン郡長一行が越冬場所の確認と家畜の頭数調査に訪れる
11 月初旬	ボヤン	宿営地の所有者	ボヤンが宿営地を使用する代わりに所有者に 2 頭のヒツジを屠って贈与
12 月中旬	ボヤン	ウルギー郡の隣人	両者の間で種ヒツジを交換（頃合いだった）
	ボヤン	ウルギー郡の隣人	ボヤンが TV とアンテナを貸与
12 月末	バト家に居候している少年牧夫 2 名		ウルギー郡の青年会主催の新年パーティーに参加
1 月下旬	ボヤン、ゴンボ	ウルギー郡の家畜交換商	家畜商が弱った子畜を求めて訪問。 ボヤンは 2 頭の子ヒツジ（25 千 tg/ 頭）を売却。 ゴンボも数頭の子ヒツジを売却。
1 月下旬	ボヤン	ウルギー郡の家畜交換商	ボヤンが計3頭のラクダを購入
1 月下旬	マルチン郡の牧民	ウルギー郡長一行	ウルギー郡長一行が訪問しマルチン郡の牧民たちから牧地使用料を徴収、妊婦バダムの健康診断
1 月末	ボヤン、バト	ウルギー郡の食堂民宿経営者	ボヤンとバトは越冬中に溜まった牛糞を譲渡 （大型トラック 1.5 台分）
2 月初旬	ボヤンをはじめとするマルチン郡の牧民	マルチン郡長一行	マルチン郡長一行がウルギー郡を訪問、帰郡者の確認、帰郡前の調査および家庭医薬品一式を差し入れ
1 月下旬～ 2 月初旬	バト夫妻	タリアラン郡の牧民老人 （ラマ僧）	バトは老人から茶に招かれ出かける。 後日バトは老人を家へ招き、 キャンプを離れる時期について占ってもらった。

1. ボヤンの離脱

【事例2】

移動時期についてのボヤンとゴンボの話は、当初から行き違っていた。1月中旬に、ゴンボは筆者に対して「ボヤンも一緒に〔1月〕25 日に引っ越す（*nuune*）」と語った。しかしボヤンに確認すると、彼は「引っ越さない。2月になってから」と話し、妻のバダムは「2月 10 日までの間に引っ越すみたいだ」とボヤンの意向を把握していた。1月 26 日に統合していた両者の家畜を選り分け、ゴンボは翌 27 日にウルギー郡を発った。

バトもまたゴンボと同日に移動する予定であったが、出発当日に家畜の数が揃わなかったとして、居残った。ボヤンは、妻のバダムから「バトさんと一緒に引っ越せばいいじゃない」と進言されたものの応じなかった。筆者がどのように移動するつもりなのか尋ねると、バトよりも後に（近隣のマルチン郡出身の牧民から）トラックを手配して移動するつもりだと答えた。

2月2日には話が一転する。バダムは筆者に対して、ボヤンとバトが一緒に移動することになったと話した。2 月 4 日になるとボヤンは、バトが翌 5 日に移動することになったと告げた。ボヤンはその理由を語らなかったが、これはバトが 2 月 2 日に近隣に宿営地を構えた他郡の僧を家へ招き、出発に良い日を占ってもらった結果である。ボヤンは「バトさんが〔道中で一時的に〕滞在する宿営地には井戸はあるが草がない」ため、一緒には行かないことを決めたと話した。状況が二転三転した末に、筆者が「〔いったい〕あなたは正月にどこにいるの」と尋ねると、ボヤンは「3月の空だけが知っているさ」と答えて笑った[20]。

20　この「空」は、モンゴル語の「テンゲル（*tenger*）」に対する訳語である。空や天気の状態を表すほか、「天」と訳すこともでき、その場合には「天空神」（島村 2011: 24）としての超自然的存在を指し、モンゴルの宗教的世界観に位置付けることのできる語である。

最終的に、バトは予定した日よりも1日遅れ、2月6日にウルギー郡を出発した。ボヤンは、2月10日にウランゴム市に住む兄BSの助けを借り、姉の所有するワンボックスカー（日産・キャラバン）に荷を積んでウランゴム市へ向かい、マルチン郡の中心地に住む親友のトラックでマルチン郡に戻った。ボヤンが自身の冬営地に着いたのは2月20日であった。

マルチン郡からウルギー郡へやってきたときには、ボヤンのオトルはゴンボとバトの協力を得て可能になった。しかし、利害が一致しない場合には容易にその関係は解消される。望ましくない家畜の状態から移動を急いだゴンボに対して、家畜の頭数が揃わずに移動を延期したバト、バトと一緒に移動することを一度は決めながら、牧草の状態が悪いという理由でそれを中止し結局単独で移動したボヤンらの行動は、当初の予定から二転三転しながら三者三様におこなわれた。

数日の間に移動の兆しが現れ、それまで共に行動していた協同的な諸世帯が速やかに解散し、それぞれが自己の移動を決定していくプロセスは、そのときどきの状況に応じて編成と解体を繰り返すモンゴルの牧民社会における協働のあり方を端的に示している。この離合集散性は、モンゴルの牧畜社会のあり方の特徴として理解されてきた（風戸 2009: 95-97）。また、諸世帯が必要なときによりよい資源にアクセスする機会主義的な移動が、重要な牧畜戦略として指摘されてきたことは、上記の離合集散性の動機として位置付けられる（e.g. Means 1996: 127; Sneath 2003: 444）。しかし、マーフィや上村によりながら先に述べたように、かれらの移動は、資源獲得のための戦略によって決定、実行されるだけでなく、牧民たちが直面するさまざまな事情に左右されながらその道筋を変化させていった。

まず、ゴンボは家畜が弱っているために、その場所から離れることを急いだが、バトは、家畜が揃わなかったという理由で移動を延期した。こうした点は、つねに家畜の状態や逸失といった完全に制御することのできない事象に影響をうけている牧民たちの日常を反映しており、生態学的に理解することができるし、種々の理由で宿営地の構成が頻繁に変化するのは、モンゴルの牧畜社会では自明の理である。その一方で、バトは、ラマ僧の占いによって次の移動日を決めた。最終的には移動はさらに延期されたものの、縁起の良い日を選んで宿営地を移動するという宗教的世界観のもとで、バトが家畜を揃えた後も数日ウルギー郡に留まったことが生態学的な理解の範疇にとどまらないものであることは、特記できるだろう。ボヤンが先にゴンボとの協働体制を解消した際にも、必ずしも生態学的な理解にとどまらない要因があることを示唆する出来事があった。

【事例3】

ボヤンとゴンボの別離に先立って、統合していた家畜を分ける作業が行われる前日、ボヤンはゴンボの家で夕食をとった。酒を飲んだのであろう、深夜に帰宅したボヤンを追うように、ゴンボと一緒に出発する予定のもう一人の友人が訪ねて来た。二人とも酒に酔った様子はなく、落ち着いた様子で出された茶を飲んでいたが、友人の方は程なくしてボヤンに対してゴンボからの離脱を思い留まらせるように語りかけた。内容は概ね以下のようなものである。

「どうして、引っ越すのをやめてしまったんだ。俺はゴンボと引っ越した方がいいと思うがなあ…。しかし〔最後は〕自分で決めろ」
「ゴンボと何かあったのかい?言ってしまわないのか。どうして、急に〔ゴンボと共に〕引っ越さないなんて言い出したんだ。まあ、分かるよ。あいつは酔っぱらうと酷い。素面ならとてもいいんだ。だが酔うと酷い。だから俺は関わるのを避けているんだ。…でも、一緒に引っ越した方がいいと思うがなあ…。しかし〔最後は〕自分で決めろ」
「ここは良くないよ。そうだろう。草もないし、故郷に戻れば〔燃料の〕牛糞だってたくさんあるだろう。そうだろう?」

友人はときおり黙り込みながら、つぶやくように話をした。ボヤンはその間無言でうつむき、座っていたが、友人が帰ったあとで「あいつ〔ゴンボのこと〕が聞いてこいといったんだろう」と妻にこぼした。

この友人は、ボヤンたちと同世代の牧民である。ボヤンとこの友人がレギュラーで用いる宿営地は近接しておらず、登録されているバグ（行政区）も異なるが、春や夏のオトルではボヤンやゴンボ、バトらとこの友人が近くに滞在することもあり、ボヤンと妻バダムの会話のなかでときおり名前が挙がる程度には親しい人物であった。ボヤンが不得手な自動車やバイクの修理を代行してくれたこともあり、面倒見のよい一面もある。そして、ウルギー郡で越冬していたこの冬のはじめに日帰り放牧に出したまま回収できていなかったボヤンの種ウシを預かってくれていたのも、この友人であった。ボヤンのいうよう

に、ゴンボに頼まれてきたのかもしれないが、彼のボヤンに対する語りかけは、同世代の牧民のなかでの関係性や友人自身の面倒見の良さといった背景に位置付けられる。

この友人の語りは、当時のこの宿営地の諸条件が、すでに宿営地を発つに十分な状態であること、そして、ゴンボの出立の機に乗じて移動するのがよい策であることを示唆している。それにもかかわらず、単独で移動する手段をもたないボヤンがわざわざゴンボと別行動をする理由が、友人には判然としなかったのである。そして、日ごろから酒を飲むと前後不覚になるほどに酔っぱらうゴンボに対して、ボヤンが距離をとろうとしたことが理由ではないかと想像したのだ。このように、友人によってボヤンの離脱に社会関係上の要因がある可能性が提示されたことは、重視できるだろう。

2. コミュニケーションの〈余白〉

このときのボヤンらの宿営地移動をめぐる決定の要因として、上記の事例から述べることができるのは、いつ、どこへ、誰と移動するのかという問題である。いつ移動するのかという問題をめぐっては、そのときに移動している宿営地から離れる必要性を意味する牧草地や周辺の環境の悪化と、ゴンボの家畜の状態の悪化、そしてバトが当初予定していた移動日に家畜が揃わなかったという事情から、三者がそれぞれに離散していくプロセスの一端を理解することができる。また、バトとの同行をとりやめたボヤンがその理由として「草がない」ことを挙げたように、どこを経由して移動するのかをめぐる判断の差もまた、かれらの離散の一因となっていた。ボヤンの移動手段の不在から周囲の人間が気にしていた「ボヤンが誰と移動するのか」という問題をめぐる三者の行動や語りは、こうした諸条件への反応がそれぞれに異なることから二転三転し、結果としてボヤンはゴンボやバトから離脱したと理解できる。

ただし、本論において重要なのは、友人の語りから、以下の二点が分かることである。第一に、この友人がボヤンの離脱の原因をゴンボから距離を置きたくなったボヤンの心理に求めているらしいことである。そして第二に、ボヤンがゴンボに対して離脱を理由づける説得的な根拠を示しておらず、ゴンボがそれに対する不信を抱いているとボヤンが理解していることである。第一の点は、人と人との関係のなかでの小さなほころびであっても、牧民の移動に影響を与え得るということを、牧民たちが認めているということを意味する。先に挙げた上村明は、モンゴルの移動牧畜において、具体的なヒト、家畜、住居の構成が個別で特殊な事情によって決定されているように見えることを指摘している（上村 2017: 29）。もちろん、この友人の推察が正しかったとしても、ボヤンの離脱の動機は、必ずしも人間関係上の距離の調整という一点のみに起因するわけではない[21]。しかし、それがボヤンの離脱をめぐる語りのなかで強調されたことは、移動牧畜という生業のなかで離合集散するかれらの生活世界において、かれらの社会生活もまた動きをともなって展開しており、そのなかで生じる個別の事情もまたかれらの移動を構成する重要な一部であるという理解が妥当であるということを教えてくれる。

第二の点は、こうした動きを伴う牧民社会の生活のなかで、諸個人がヒトや家畜を動かす理由を明かさないことで、諸行動の理由や目的の不明瞭な領域が生じることを示している。ボヤンの離脱に至るプロセスが筆者にとって一見不可解なものとして現れ、また学術的に記述するには不確かなものとならざるを得ないのは、この不明瞭な領域のためである。共に移動する家族や、別離する友人にその理由は明かされることはなく、「いついつに出立する」という計画だけが述べられる。ボヤンの妻バダムは、ボヤンにバトと共同で移動しないのかと尋ねるが、その答えは返らなかった。筆者がどうにか明瞭な理解を得たいと考え、行動の理由や計画を尋ねても、求める答えは返ってこない。また、その不明瞭な領域に、ゴンボやバト、友人らの決定やはたらきかけが介入するために、ボヤンの移動までの判断のプロセスが紆余曲折したものとして現れるのである。このことは、宿営地移動をめぐる情報が明かされず、何をどのように考慮して移動時期や移動先を決定していくのかという過程は世帯主の心の内に留めておかれるという牧民社会の傾向を背景としている（風戸 2009: vi；堀田 2018: 58-59）。

加えて、本論において筆者が重視するのは、「自分で決めろ」と呼びかける友人のことばである。直訳すれば「自分で知れ（*öörööö med ee*）」という意味で、モンゴルでは頻繁に用

21　この点に関して、ボヤンとゴンボの間に2世帯の統合した家畜を管理する作業の多寡が生じていたり、妊娠していたボヤンの妻の体調に配慮した可能性を匿名の査読者より指摘していただいた。この可能性について正しく検討する根拠を筆者はもたないが、たとえば家畜管理作業のなかで大部分を占める日々の群れの放牧を担ったのは、ボヤンやゴンボだけでなく、ボヤンの妻やゴンボの息子、バトの家に居候する牧夫たちや筆者自身など、協働する3世帯の成員がおこなっており、作業量に離脱の要因になるほどの著しい偏りがあったとは考えにくい。

妊娠する妻バダムの体調に配慮することについては、移動の直前である1月中旬から下旬にかけて、バダムがオブス県の中心地ウランゴム市を8泊9日で訪れて医師の診察を受け、すでに休養をとっていた。また本論でも述べたようにマルチン郡からウルギー郡に移動した際には気温が低く降雪のある、より厳しい環境下でもバトとボヤンに同行していたことや、バダム自身がバトと移動することをボヤンに勧めていたことなどを考えると、やはり離脱の強い要因とならないのではないかというのが筆者の推測である。補遺として記しておきたい。

いられることばである。風戸真理も、ホストファミリーから突然告げられた春営地から夏営地への移動に際して「あなたたちと一緒に秋営地へ行ってもいいですか」と尋ねたところ、世帯主が「自分こそが知れ（*ööröö 1 med*）」と答えたという体験を記述し、かれらの意思を表面化させない傾向を指摘する。そして風戸は、この答えを拒否ととるか黙認ととるかは、受け手に開かれている、と述べ、モンゴルの言語コミュニケーションの特徴を指摘している（風戸 2009: vi）。

堀田あゆみは、モノ・情報が所有する者の下に留まらず、人から人へとつねに移動する可能性が当然のこととして共有されているモンゴルの牧民社会を高度な情報社会であると看破する（堀田 2018）。堀田は民族誌のなかで、モノ・情報が頻繁にやりとりされるモンゴル社会における「情報戦」を詳細に記述・分析しているが、そのなかでも最もプライベートな領域として「秘匿」されるモノ・情報があることを認めている（堀田 2018: 229-237）。この明示されない領域は、明示され、交渉の俎上に乗せられる他の諸事物に比して、他者によるアクセスが遮断される。そして外部者はその領域にむやみに踏み込むことを自重する傾向が顕著である。このコミュニケーション様式が暗黙の了解として共有されていることによって、真実は秘匿者（やその家人）と外部者とのあいだに未決定のまま取り残されることになる。

ここで、モノや情報のやりとりに際してさらなる追求をしない、あるいはそれを拒否することによって残される領域を、社会関係や交渉の〈余白〉と呼びたい[22]。三者三様の移動の決定に際して、互いの意思を確認し合うような濃密な対話はみられなかった。むしろ、かれらにとってそれぞれの判断の間に生じる齟齬をそのままに残すことの方が当然といえる。ボヤンがひと月後の宿営地がどこになるかは「3月の天だけが知っている」と語ったことも同様である。これは、未来の不確実性を表現したことばであるとともに、上記のような〈余白〉を生じさせることばである。ボヤンの真意は、筆者に明かされないだけではなく、彼の妻や、ゴンボ、バトも知らないことであった。ボヤンの真意がいかなるものであるかは、語られないと同時に、受け手に開かれてもいる。それを未決定なまま留め置くという関係のあり方が、モンゴルの牧民たちの社会性の特徴であるともいえるのである。さらにいえば、友人がボヤンの決定の周囲にある〈余白〉に、ゴンボから距離を置こうとしているボヤンの心理を読み込んだように、この〈余白〉があるからこそ、かれらの社会関係は未決定で動きを伴うものとして現れてくるともいえる。

そもそもモンゴルでは他者の要請をできるだけ拒絶しないという価値観が共有されており、他者を受け入れる寛容さを重視するなかで社会生活が営まれている。これは、コミュニケーションのその時点において、当事者たちがかれらの関係の調和（*evtei*　エブテイ）を重視し、不和（*evgui*　エブグイ）を未然に防ごうとする観念に基づいている（シンジルト 2016: 478-479）。シンジルトが「エブグイを回避する実践は他者の都合を伺いその意図を推測しながら、自らの出かたを決めていく繊細な作業過程のことである。自分の都合を強調したり、自分の意思を相手に押し付けたりするような態度全般をその根本から否定する行為のこともある」と述べていることは、彼らが濃密なコミュニケーションのもとで宿営地構成や移動のプロセスを実行しているわけではないという事実を理解するうえで有効な見方を提供してくれる（シンジルト 2016: 479）。

ゴンボが友人を遣ってボヤンの「真意」を尋ねにきた（ボヤンはそのように理解した）のは、夜、三人が共に酒を飲んだあとのことであった。これは、例外的なことであるというよりも、真意を明かすことを控える社会生活において、「夜」や「酒盛り」が、閉じられていた言葉の蓋を開くきっかけとなり得るということを示している。そして、そのうえでもなお、ボヤンとゴンボの間で直接「真意」を確かめ合うということはないのである。それは、自己主張を控え、かれら自身の生活世界がポジティブなものであることを求める行動原理に支えられた、社会的なふるまいであるといえる。

V　動き、距離をとることで「調和」する生活世界

上記でみてきたような、エブグイを避け、エブテイを求める行動原理と〈余白〉の関係について少しスケールをずらして考えてみると、ボヤンによる離脱もまた、エブグイを避け、エブテイな状態へと身を進める動きであった可能性がみえてくる。

シンジルトも簡潔に説明しているように、両語の語幹に用いられている「エブ（*ev*）」は、①人と人との関係やその合致、

22　里見龍樹は、ソロモン諸島マライタ島で漁労と自給的農耕を営む人たちの生の偶有性を論じた民族誌のなかで、自然環境の不確実性とそれに根ざす生業様式のもとで生きる人びとが、漁労や農耕の活動のなかに「われわれ」の関与し得ない領域を残していると述べる。里見はそれを「余白」と呼び、「自然」との関わりが本質的に帯びている偶有性を示すものであると述べている（里見 2017：52）。本論は、モンゴルの牧民たちにとって、生業に根ざす「自然」との関わりの偶有性という意味においてのみならず、かれらにとって社会生活もまた不確実性を帯び、かれらの関与しない領域を残しているという意味においても、〈余白〉という語を使用している。

②ものごとをおこなう技法[23]、③ものを使うときの適当な快適さ、④ものごとが適合していること、といった意味をもつ語である（MUYTG　2019；cf. シンジルト　2016: 472）。エブがある（*ev-tei*）状態は、人と人の関係が良い、一致または適合した状態、またはものごとをおこなうのに具合の良い、快適な状態を意味し、エブがない（*ev-güi*）状態は反対に、そうした良好さや具合の良さ、快適さのない状態を意味する。これは、単に機能的な関係や具合の良好さにとどまらない、特有の価値観に支えられた観念である。すなわち、人びとが自然環境や家畜といった完全なコントロールの及ばない存在との関係を調整し、移動しながら生きてきたなかで培われてきた、「周りに対する配慮であったり、ものに対する禁欲的な態度であったりする、控えめな人間の姿勢の総体」であり「人間も含む諸存在が互いに均衡を保ちかつ平穏にいられるあり方そのもの」（シンジルト　2016: 479）なのである。この意を汲んでいるからこそ、たとえば蒙日辞典や蒙英辞典では、エブというモンゴル語は「調和」や「harmony」という訳語を含んで翻訳されている（e.g. 小沢　1983: 583；Tömörtogoo 1979: 836）。そして、エブテイであることを求めるモンゴルの人たちの身の処し方の一つに、移動することがある。関連する事例を一つ挙げよう。

【事例4】

2017年7月に、筆者はマルチン郡での調査中、バダムの両親である老夫妻とかれらの3人の息子たち4世帯がホトアイルを構成して暮らしている夏営地を訪れた。この4世帯はヒツジとヤギの群れを統合したうえで二つに分け、3人の息子たちが交代でマルチン郡の南端にあるヒャルガス湖畔でヒツジとヤギに水分を与えるためのオトルをおこなっていた。訪問時、息子たちはオトルのため不在であったが、老夫妻と、息子たちの妻は家に残り、それぞれにウシの放牧と乳製品の製造をおこなっていた。ある日、長男の妻の腎臓が痛むということで、ラマ僧に診せるために長男が夏営地へ戻ってきた。妻は妊娠中だったので、体調がすぐれないことを心配したのだ。夫婦は、ゲルの位置が悪いという答えを得て帰ってきた。そこで夫婦は、4世帯からなるホトアイルを約1km北へ離れたところへ移動させることを提案した。そのホトアイルの南側には、歩いていける距離に他の4世帯が宿営地を構えていたため、北へ離れるとそうした諸世帯との距離が拡大することになる。世帯間協働がしづらくなることや、ゲルを移動させる手間がかかることなどを理由に老夫妻は長男夫婦の提案を退けたが、最終的には長男夫婦のみがゲルを移動させた。

長男夫婦がホトアイルから離脱したのは、かれらが身体的な不調や、子どもの出産という家庭の安泰にも関わる不安を解消しようと考えたためである。もちろん、1kmほどの距離であれば、全く往来が不可能になるわけではなく、また利用可能な牧草地に変更があるわけではない。しかしたとえば日用品の貸借や、家事労働の共有などが困難になり、その意味では、協同性を犠牲にして、身体や家庭のエブグイな状態を回避することを選択したといえる。

小規模とはいえ、全く生態的でない動機で移動が実践されていることや、その理由として考えられるのがエブグイな状態の回避であることは、牧民たちの移動を、環境への適応としてのみならず、生活世界全体のなかで理解するうえで分かりやすい事例となる。そして、ホトアイル全体で移動する労をとることを良しとしなかった老夫妻とのあいだで利害が一致しなかったことが、単独世帯の（小規模な）離脱を生んだ。両者のあいだに物理的な距離が生じたことは、両親の行動の便や協働のあり方からみればエブグイな状態であるかもしれない。しかし、それを許容し、それぞれが然るべき位置に落ち着くことは、モンゴルの人びとがそのときどきに置かれた諸環境に呼応しながら生きる行動様式のなかではエブテイなことであったといえよう。

このように牧民たちは、移動しながら牧畜をおこなうだけではなく、かれら自身をとりまく社会のなかで、人と人の関係を築き、社会をその都度再編させながら暮らしている。ボヤンとゴンボ、バトラがそれぞれに離散していったプロセスもまた、それぞれが、牧草地や家畜の状態、宗教的世界観からみた家内の状態、そして人と人との関係といった諸状況において、エブグイを避け、エブテイであることを求めた結果として現れたものであると理解することができる。ボヤンがかれらから離脱した背景に、友人が語るようなネガティブ（エブグイ）な心理があったとしても、それを語らずに保留し、それぞれが然るべき方向へと行動をおこしていくことは、全体としてエブテイな状態へと移行していくことでもある。

ボヤンはウルギー郡を離れる前にもうひとつ興味深い行動をとっていた。それは、ラクダの購入である。当時の筆者にとっては、経済的事情がひっ迫するなかでの大きな買い物が不

23　これはド・セルトーのいう「もののやりかた」としての「術」に近いだろう（ド・セルトー　1987）。

可解であったと思われたのだが、上述してきた「エブ」という観念に関連している重要な出来事のように思われるため、最後に示しておきたい。

【事例5】

ウルギー郡から離れる前に、ボヤンは、家畜の売買を通じて既知となったウルギー郡の家畜商をとおして、ラクダを購入した。妊娠中のメスが1頭、2016年の春に生まれた子畜を伴ったメスを1頭の計3頭である。妊娠中のメスのラクダには、3才ヒツジ8頭、親子のラクダには3才ウシ2頭を支払い、合わせて約150万トゥグルク（約7万円）、国立大学の学費1年分に相当する大きな買い物となった。

購入に先立って、家畜商との口約束を電話でおこなったあと、ボヤンは筆者に「ラクダを買うんだ」「1頭は子持ちで、1頭は来年の春生まれる」と嬉しそうに報告した。筆者はボヤンの唐突な行動に驚き「ラクダで何するの?」と聞いた。近年自動車所有の増加によって、荷の運搬用の役畜としてのラクダの価値は減少しており、マルチン郡でもラクダを飼育する牧民世帯は稀だからである。ボヤンは「五畜所有していたら素敵（*goyo*）だろう」と答えた。実際にラクダが到着した際には、ボヤンがラクダを飼うのが初めてであるため、初めての畜種を迎え入れる儀式（ラクダに乳を振り撒いて寿ぐ）をおこなった。また、ラクダを引いてきた手綱をボヤン自身の手綱に交換し、恭しく家畜商に戻す儀式もおこなわれた。これらの儀式の後、家畜商はボヤン家から500mlのウォッカ2本とウマのゆで肉によるもてなしを受け、また礼として菓子の包みを贈られた。家畜商は返礼として1万トゥグルク（約5000円）をボヤンに渡した。

ボヤンの3人の子どもたちのうちウランゴム市の学校へ通う長女と長男は、学校が休みになった際に一時ウルギー郡の冬営地へやってきた。その際、ラクダを買ったことを喜んだ子どもたちに対して、ボヤンは「そのうち、ラクダで移動するようになるんだよ」と語りかけた。その後、3頭のラクダは、ゴンボが所有するラクダの群れに混ぜて管理してもらうことになったために、ゴンボの移動に伴ってボヤンの下を離れた。

ラクダを買うというこの出来事は、越冬先で生じた、もっとも大きなできごとであったように思う。

ラクダは、寒さや乾燥といった厳しい環境に強い家畜である（Sürd-Erdene 2014: 539）。寒害に備えて、ウシやヒツジ、ヤギといった寒さに弱い家畜に比して寒さに強く、移動手段ともなるラクダを維持しようという戦略をとる場合があることも報告されている（風戸 2009: 196）。また、ボヤンは同時期に同じ商人に成長度の低い子ヒツジを売却しているように（表1参照）、この時期に弱い家畜を手放す慣例があることも事実である。しかし、厳しい冬を乗り越え、暖かくなったタイミングでのラクダの購入であったことや、現代においてはかなりの程度自動車での移動が常態になっていることから、全ての理由を上記のような牧畜戦略に求めることはできないだろう。また、ラクダは妊娠から出産までに2年かかるため、ラクダでの移動が可能になるほどに頭数を増やすには少なくとも6～7年は必要である。「そのうちラクダで移動するようになる」というボヤンのことばも、確かな理由というよりは言祝ぎの性格をもつものとして考える方が妥当である。越境して越冬を行った異郷で得たラクダをその後売ることを想定し、交換財としての価値に投資した、という動機も考えられる。この点については、2018年の夏に再度ボヤンのもとを訪れ、その後のラクダの動向を確認したところ「子畜はいなくなってしまい、その母親は売ってしまった」という答えを得た。こうした結果に鑑みても、投資という行為そのものが、牧畜という営みが内包する不確実性を強調している。あるいは、この行為が多くの家畜を費やした衝動買い、すなわち浪費であった可能性もある。

その一方で、自己の行動についてあまり多くを語らない〈余白〉の周辺でラクダの購入当時に語られたのは、「五畜所有していたら素敵（*goyo*）だろう」という説明と、「そのうちラクダで移動するようになるよ」という子どもたちへの語りであった。このいずれも、核心を明かさずに、美しい（*saihan*）ことばで生活空間を満たそうとするモンゴルの言語世界を反映させているため、全くの真意として理解することは適切でない。しかし、こうしたことばを伴うほどに、ラクダの購入は祝福的な出来事であった。「素敵（*goyo*）」という語は、もともと見目麗しさや装飾の見事さを意味する語であるが、今日では見た目に加えて質的な意味も伴って用いられるようになっており、特別上等なものごとを指して頻用される。これらのことばは、ボヤン家が五畜を所有するようになったことや、ラクダという牧民のモビリティを象徴する家畜を迎え入れたことがいかに喜ばしいことであったかを示しているのである。筆者がマルチン郡の中心地に立ち寄り、ボヤンがラクダを購入したことを郡に暮らす人びとに話した際にも、その反応として語られたのは「素晴らしい（*saihan*）」という祝福のことばであった。本論冒頭でとりあげたエンプソンが「幸運のハーネス」という表現を用いて考察しているように、モンゴルでは富や豊かさはひとところにとど

まらない動きのなかで訪れるものとして捉えると、ボヤン家が迎え入れたラクダもまた、かれらが、動きのなかで訪れ、ときに去っていく幸運や豊かさを希求したことの現れなのではないだろうか。

そして、そのラクダがゴンボに預託されたことは、ゴンボとボヤンの当時の関係が、ボヤンによる離脱ということによってのみ意味づけられるわけではないことも示している。家畜の群れが分割可能であり、また預託可能であるということは、人間同士の物理的距離を超えたところでさまざまに築かれ、ときに結び直される社会関係こそが具合のよい、エブテイなものであることと結びついている[24]。

Ⅵ おわりに

本論でみてきた、牧民ボヤンによるオトルの要因を目的論的な見方で述べるならば、厳しい冬を乗り越えるため、多くの家畜を失うリスクを減少させるため、そして、次の春から始まる一年に備えて家畜をできるだけ痩せさせないため、といった点を挙げることができる。しかし、ウルギー郡の人びとが使用した秋営地の牧草は、冬の終わりにはすっかりなくなっていた。そんななかでゴンボは種オスを含む数頭のヤギを失った。ボヤンがヒツジやウシをラクダと交換し、そのラクダを翌年手放したり、失ったことは、ラクダの価値の余剰をボヤンにもたらさなかった。かれらの牧畜は、そのときどきの選択の局面をみれば、直面する不確実性を乗り越え、また別の不確実性に賭けるような営みなのである。

このような家畜との関係における予測不可能性のただなかに身を置くことによって、牧民たちは自らが生きていく動きを伴った生の予測不可能性を知っている。だからこそ、かれらは確実な予定を口にせず、他者の行動に干渉することを控え、人と人との関係においても不確実な〈余白〉を残しておこうとするのではないだろうか。本論において、牧民たちの移動は、それまでのかれらの経験や社会関係の束を頼りとしながら、一回的な営為として現れていた。そして、かれらにとって、移動し離合集散することは、決して一方向的で直線的な営みではない。家畜や牧草地の状態、社会関係、経済状態、移動手段の有無など、さまざまな環境に呼応し、それぞれの世帯がエブテイであることを求めて動いていく。ボヤンがゴンボ、バトから離脱したことは、ゴンボにとっては期待外れの出来事であったかもしれない。だが、それぞれの生と豊かさが、一所に留まらず、ときには集合するという、動態的なものであることをかれらは許容する。本論では、この動態的な生き方が、かれらの社会が動きのなかで調和したものであることを支えているのだということを議論してきた。

「自分で決めろ」と他者の行動を他者自身に任せ、それを受け入れる〈余白〉によってしか、離合集散する家畜と人、人と人との関係は築くことができないものなのであろう。確実性や固定性のなかで安定した豊かさを積み重ねていこうというような志向性は、かれらにとっては具合の悪い、エブグイなものになってしまう。そして、エブグイなものを否定し、拒否するのではなく、別の可能性へと身を進めることによってエブテイなものへと結び変えていくしなやかさを、かれらは有しているようにみえる。

最終的にゴンボとバトから離脱したボヤンが頼ったのは、兄の BS や姉の PS、そして当初マルチン郡から出発するときには車の故障によって頼ることができなかった友人 JY であったように、あるものごとが実現していく道筋は一つではない。つねに別の可能性へと身を投じていくことのできる柔軟性をもっているのが、かれらにとっての具合のよい、エブテイな生き方であり、それを支えているのが、さまざまな可能性を未決定なまま留保し、〈余白〉として残しておく価値観なのである。生活世界のなかに息づくこの価値観に根ざして、かれらの移動や宿営地の構成は一方向的でない動きを伴う不断の営みとして積み重ねられている。

謝辞

本論は、シンポジウム「不確実な世界に住まう——遊動／定住の狭間に生きる身体」（主催：南山大学人類学研究所）において報告した内容に基づいている。

24　ここの点に関連して、ボヤンと兄 JG の協働体制と家畜預託の変遷について補遺として記しておきたい。

ボヤンと兄 JG は、本論で言及したように JG の家畜をボヤン家に預託し、JG の息子をボヤンの近くに宿営させるというかたちで協働体制をとっていた。しかし、当時 JG は息子の将来のために家畜小屋付きの冬営地を購入するなど、ボヤンと JG との協働は解消される過程にあった。実は、この越冬中、ウルギー郡に滞在するボヤンを JG の友人が訪ねてきて、JG がボヤンに預託していたウマを回収し、ボヤンのもとから JG の家畜全てが去るという出来事があった。これによって、JG の家畜群はこの友人に預託され、そこで息子が家畜の世話をするという体制に移行した。

JG の息子はこの時点では完全に独立したわけではないが、ボヤンと JG の協働体制の解消は、息子の独立へと向かう JG 家の新しい動きと表裏一体であり、JG 家にとって喜ばしく「エブテイ」なこととして理解できる。

また、その報告内容を発展させ、北東アジア環境人類学　日中交流セミナー「動物資源をめぐる文化のデザイン」（主催：NIHU ネットワーク型基幹研究プロジェクト「北東アジア地域研究推進事業（北東アジアにおける地域構造の変容――越境から考察する共生への道）」東北大学東北アジア研究センター拠点）において報告した内容も反映させている。両シンポジウムおよびセミナーに参加者からは多くの重要なコメントをいただいた。

本稿の投稿に際しては匿名の査読者2名からも非常に有益なコメントをいただいた。

すべてのコメントに応えるには筆者の力量・調査が不足しているが、今後の課題とさせて頂きたい。ここに記して上記の皆様すべてに深く感謝いたします。

参照文献

（日本語文献）

東賢太朗・市野澤潤平・木村周平・飯田卓（編）
2014　『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』、世界思想社。

飯田卓
2014　「自然と向きあうための技術的対応と社会的調整――マダガスカル、ヴェズ漁民が生き抜く現在」『リスクの人類学――不確実な世界を生きる』東賢太朗ほか（編）、pp.262-284、世界思想社。

稲村哲也
2014　『遊牧・移牧・定牧――モンゴル、チベット、ヒマラヤ、アンデスのフィールドから』ナカニシヤ出版。

インゴルド、ティム
2014　『『ラインズ――線の文化史』工藤晋訳、左右社。

尾崎孝宏
2019　『現代モンゴルの牧畜戦略――体制変動と自然災害の比較民族誌』風響社。

小沢重男
1983　『現代モンゴル語辞典』大学書林。

風戸真理
2009　『現代モンゴル遊牧民の民族誌――ポスト社会主義を生きる』世界思想社。
2015　「時空を超えて暮らしを包む住居――モンゴルゲルのフレキシビリティ」『世界の手触り――フィールド哲学入門』佐藤知久ほか（編）、pp.109-127、ナカニシヤ出版。

上村明
2017　「適応する『主体』――モンゴル国牧畜民の世帯構成から」『文化人類学』82（1）：14-34。

小長谷有紀ほか
2018　「モンゴルにおける宿営地集団の研究――A. D. Simukov の『ホト』論文の紹介」『砂漠研究』28（3）、217-227。

里見龍樹
2017　『「海に住まうこと」の民族誌――ソロモン諸島マライタ島北部における社会的動態と自然環境』風響社。

島村一平
2011　『増殖するシャーマン――モンゴル・ブリヤートのシャーマニズムとエスニシティ』風響社。

シンジルト
2016　「共生の実際――中国西部における民族間の擬制親族関係」『文化人類学』81（3）：466-484。

Tömörtogoo, D
1979　『現代蒙英日辞典』小沢重男・蓮見治雄（訳）、開明書院。

ド・セルトー、ミシェル
1987　『日常的実践のポイエティーク』山田登世子（訳）、国文社。

富田敬大
2012　「体制転換期モンゴルの家畜生産をめぐる変化と持続――都市周辺地域における牧畜定着化と農牧業政策の関係を中心に」『生存学研究センター報告』（17）：372-407。

藤田昇・加藤聡史・草野栄一・幸田良介（編著）
2013　『モンゴル――草原生態系ネットワークの崩壊と再生』京都大学出版会。

堀田あゆみ
2018　『交渉の民族誌――モンゴル遊牧民のモノをめぐる情報戦』勉誠出版。

モンゴル科学アカデミー歴史研究所（編著）
1988a　『モンゴル史　1』二木博史ほか訳、恒文社。
1988b　『モンゴル史　2』二木博史ほか訳、恒文社。

ロッサビ、モリス
2007　『現代モンゴル――迷走するグローバリゼーション』小長谷有紀ほか（訳）、明石書店。

（英語文献）
Carsten, Janet
2004　*After Kinship*. Cambridge University Press.

Empson, Rebecca M.
2011　*Harnessing Fortune: Personhood, Memory, and Place in Mongolia.* The British Academy.

Fernandez-Gimenez,
1999　Sustaining the Steppes: A Geographical History of Pastoral Land Use in Mongolia. *Geographical Review* 89（3）: 315-342.

Hardin, Garrett
1968　The Tragedy of the commons. *Science* 162（3859）: 1243-1248.

Humphrey, Caroline. and David Sneath
1999　Introduction. In *The End of Nomadism?: Society, State, and The Environment in Inner Asia.*Caroline Humphrey and David Sneath , pp. 1-16, Duke University Press.

Ingold, Tim
2000　*The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill.* Routledge.

Mearns, Robin
1996　Community, collective action and common grazing: The case of post-socialist Mongolia. *The Journal of Development Studies.* 32（3）: 297-339.

Murphy, Daniel J.
2011　Going on Otor: Disaster, Mobility and The Political Ecology of Vulnerability in Uguumur, Mongolia. *University of Kentucky Doctoral Dissertations.* 168.

Sneath, David
1999a　Kinship, Networks and Residence. In *The End of Nomadism?: Society, State, and The Environment in Inner Asia*. Caroline Humphrey and David Sneath, pp.136-178, Duke University Press.
1999b　Spatial Mobility and Inner Asian Pastralism. In *The End of Nomadism?: Society, State, and The Environment in Inner Asia.* Caroline Humphrey and David Sneath, pp.218-277, Duke University Press.
2003　Land Use, the Environment and Development in Post-Socialist Mongolia. Oxford Development Studies, 31（4）: 441-459.

（モンゴル語文献）
Süld-Erdene, G（ed.）
2014　*Mongol Nuudelchidiin Tailbar Tol' I* . Monsudar.

（オンライン資料）
National Statistic Office of Mongolia（NSOM）
2018　*Statistical Medeeleliin San.*〈www.1212.mn〉（最終閲覧日2018年3月12日）。

Mongol Ulsin Yrönhiilögchiin Tamgin Gazar（MUYTG: モンゴル国大統領府）
2019　*Mongol Khelnii Ikh Tailbar Tol'.*〈Mongoltoli.mn〉（最終閲覧日2019年9月15日）。

Erh Züin Medeereliin Negdsen Sistem（EZMNS：法律情報共有システム）
2019　Gazarin Tuhai, *Mongol Ulsin Huul'*〈https://www.legalinfo.mn/law/details/216〉（最終閲覧日2019年9月15日）。

The life moving in and out：
A case study on ‘otor’ wintering and herders’ cooperation in contemporary Mongolia

Moe TERAO*

The aim of this paper is to clarify the mobility of pastoral herders in Mongolia through the essential practices of moving their camps. Ecological studies have considered moving camps as strategies to use the natural environment efficiently and to adapt flexibly to changes in the natural and social environments. Also, they have explained the organization of cooperative groups led by the state during the socialist period and the formation of alternative camps after privatization, from the viewpoints of stability of pastures or risk management. However, in contemporary Mongolia, against the backdrop of the disintegration of camp groups due to an increase in the number of livestock and the increase in car ownership, some studies have suggested that pastoralists are moving due to more personal reasons. These studies, which looked closely at the individual and specific aspects of movement, shed light on the livelihood of herders living in the midst of movement, providing clarity to the discourse, such as environmental sustainability or the functions of cooperative groups.

This paper examines the meaning of moving for a herder, who took up camp outside his own administrative district in order to overcome a severe winter. As this paper shows, herders reflect their economic power and mobilize social relations to realize their current movements. And, every process of moving is more a series of single reaction to the immediate situation at hand, than a reasonable choice from multiple conditions. The immediate situation includes livestock and pasture conditions, but also conditions in social or domestic areas. And to prevent some social discords, sometimes herders establish psychological or physical distances from other herders. For the people of Mongolia, movement and distance are processes of disintegration to improve their livelihood.

Keywords:
Mongolia, pastoralism, mobility, uncertainty

*Graduate School of Humanities, Tokyo Metropolitan University